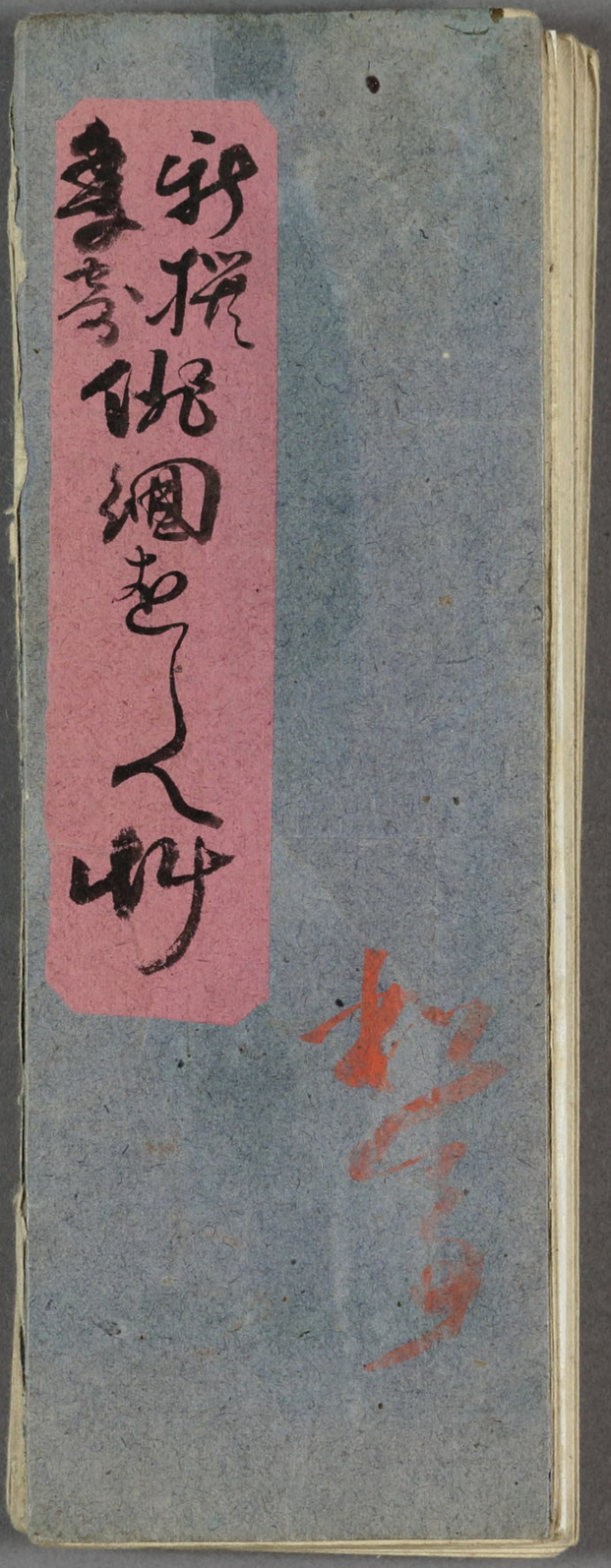


の指笑を蒙ぶされとこえより、こゝろを俳士に見ゆるとなす。
編集其新しきのにあらねば只初学の学戯この筆を
誘引せん為に老婆心ゆえ彼此重に甘酒進ちよ如
くる語にひとしからむといふべし

俳禅翁
東岡木

俳諧をしへ叶 目録

一月の部	七月の部	芭蕉翁口訣
二月の部	八月の部	同本情引句
三月の部	九月の部	新宅(とほ)句作
四月の部	十月の部	七姫の祕傳
五月の部	十一月の部	翁五体発句の傳
六月の部	十二月の部	発句切字の支

目録

○同かしらがき
○附合の支
○勺数去嫌の支
○案方
○附方
○聯勺去嫌の支
○聯勺心得の支
○二季にとゝる事
○月の定坐の支
○こぼれ月の支
○花の定坐の支
○名にて名にを附る支
○四季を持ものゝ支
○脇第三の支
○第三の支
○に留の支
○他季うつりの支
○三ツ物の解
○たまこ分四の説
○悪上中下
○初悪の支
○中悪の支
○后悪の支
○附合三儀
○附合四道
○執中法の支
○附勺に季を結ぶ事
○月花の支
○新撰五百題
○春の部
○夏の部
○秋の部
○冬の部

俳諧をしへ竹目録終

首書 俳諧秘決集
同新撰 俳諧五百題

○附合の事

発句とハ 一座の老功なれバ初発の上句ハ春ハ秋ハ
なるべく四季の季をむすび切字を入ていうもの
やうよろし句をつくるべし四季の句切字の入
やうさまざまあれバ老功ハ発句数多を記
したり考へべし

脇とハ 下の句ハ発句と同じ季をむすび発句の名
をうけ又てハなるべし 但し時候
連衆 といふすハり連衆 とハおもしろ
くもあり 発句ハ三月の発句ハ二月の季
あてハつべし二月の発句ハ三月のうきもうし
二月ハ二月の季三月ハ三月の季ハなれてつけ

新撰
季寄

堂中俳諧季寄

大垣園 東岡宗匠編輯
北明舎 貞斎千塚考正

一月

大呂律 小寒節 大寒 殷正 抄冬
季冬 臘月 歳首 葉始 肇年 改年
南年 更始 年始 復生 新正 屠蘇
改旦 開端 聖節 上日 鶏旦
開端月 睦月 祝月 初寅月 太郎月

第三とハ 上句の季ハ捨て脇よりくるゝ句なれ共一句の
たゝずまひ発句の体ハあるやうにするやうハ三月
ハさくらの季ハ捨てよし
三月ハさくらの季とハ云共ハるのせちやう四月
の若ふ通ふ季ハあり四季の句の絡ふ。かく
のとく星を付おくハ三月ハさくらの季あり
四季ともハ同し
第三ハいろとそもで。留よし
但し一座のでゞ。あるときハ。ぷとあらんとも
も。ゝともある外ハ嫌ハず
とし。のでとハ振のとをいふ。あるとき八第
三でとめハあし。きあらうと心得べし
雑の句ハ雑とハ季のあき句をいふ
四句めハ
五句めハ 月の定座ハ月ハ秋ハ

元日 元朔 元旦 三始 年日月
新年 今年 歳旦 初日
初為 年改 年礼 吟螢
四方拝 一月一日寅の刻清涼殿東階のおもてにて属星を
もらけ玉ひ燈火を灯し給ひて天地四方および山陵を拝し給ひて
年災をはらひ福をいのり給ふ 朔拝 一月一日親王以下勅奏の群臣
新年宴会 一月五日朔賀畢て后妃以下節会朝
賀天顔拝 節会ハ酒肴をたまふるあり

屠蘇 まゞ嫁せるる女嘗をめて 井閑
天子ハ元日諸臣も祝ぜり
雑煮 暦ひらき 初暦
初春

六句めハ　秋られまぐを初表といふ此内神祇釈教恋等有述懐ハの句を花
一ウ　見より初うふとよむ裏角とるいふ此次神祇釈教恋等常述懐ハ何あくもすべし

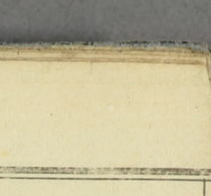
あげ句とハ挿とも老柚ともいふ全体百韻ハの終りの句あり恋の句あるべし神祇ハすべし一折ハ八句あるべし

句数月花の定座ハ表六句目裏十二句目名残面十句目

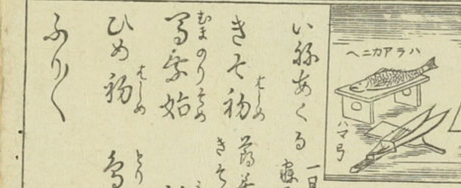
裏十二句　七句目月十一句目花の定座十二句目（花ぼさ）
一折
名残面十句　十一句目月
裏六句　五句目花の定座を句ひの花といふ
右二折合せて三十六句あり　古式ハ三花三月あれども後ハ二十五ケ条ハ俗あり二花二月を用ゆる俳諧ハ表の折ハ一ノ秋季を出して裏ハ九ノ月を出すあり恋ハ第三より月ある時ハ二花三月もあるべし

○句数去嫌の事

秋　三句より五句までつづく二句ハ捨ず五句きるべし
夜々　二句つゞきて三句去べし一句ハそすてるもくるし
神祇　二句より多くせず三句去べし一句ハそ



年棚　年迫卯吉方松　押年魚　数のみ有
掛鯛　祇園前掛　今八坂神社と改る旧元和寛刻みなひし水引之
門松　松ざり　門ざり　注連ざり　福ろふ
掾　裏白　穂長　庭竈　大服
蓬莱　掾結ひ布　串がき　ゆ老梅子　ころき笑
ひらき豆　松の内
元始祭　一月二日より七日まで



吉書初

窶　服しくとハ三日あり　股赤熱　記始ハ書ぞめ
囲柵　大あら木等の土民年始ハ林中にて此柵を
氷の様　作す貴庵のある名所の絵とよ今ハ廃せり
旧暦の元日ハ氷をとる此氷のあるとき時ハ寒さ
ゆるすき時ハ凶年ありとよ今ハ廃せり
いねつむ　一日のひねをよむ

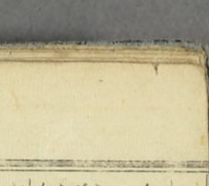
きそ初　若若の衣裳をきそめるをよむ
書始　吉まるもしめ
習字始　試筆　筆初
船乗始　酒飯初
ひめ初　多賀初
多退　万歳　大黒舞
ふりく　万祝　波魔子

子始　的はじめ　射そめ

釈教　捨そくるーかぶれ　二句より多く共に三句去べー一句そすてくるーかぶれ　一句ぞハ捨ずば三句もつづく五句去べし　一句ぞ捨てよー三句去べー　同ク　二句もつづくべし五句去べー雑用とハりて三句さるあり　二句三句つづく二句去べー句ふりて三句去あり　二句つづきもよー三句去べー雑用とハりて二句ぞゆるす　同ク　二句もつづくべー五句去あり大おとり

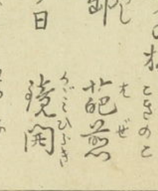
人倫　極楽　食物　衣類　器財　夜具　時分　陰陽　風雲天象

て三句ぞゆるす　二句もつづくべー五句去あり若ハ大小とりまぜて三句あり　五句去べー食物飢るのとかりて三句去べー　五句去あり雑用とらるれバ三句ぞゆるす　五句去べー三句ぞゆるす　一句つづくもくるーかぶれ三句去べし　都べて三句去べー　一句ぞ捨るを専一とす　三句去べー　一句ぞ捨べー三句去べー　同ク



十一日　六日年越　七種　せり　なづな　ごぎょう　はこべ　ほとけのざ　すずな　すずしろ　これを刻みてかゆに入るゝ事ハ人皆しる所なり　初芝居　二のとりとよめる事あり　ちゝきやうげんのうりめん　鬼おろし　福ろし　白るの祝儀　若菜

寛引　福引　手鞠つく　羽子板　毬打　羌闇　初髙座　店卸　花魁　年籠　年木　福寿草　三ヶ日　境内



笹五尺三寸お物忌中へなるおの　の板とすべき吉祥とゝふことあり　あるゐハ男ともの名を帯ゆるす事常の如し　神おろし　うらうらたち等の名あそ天をさゞ都ることありとぞ

十四日　年越　十五日　左義長　除目とゝ　中へ官吏更衣をあふ　武具競闇　十一日　繰石　爆竹をたくこと　土竈打　十日　猪杖　小さき杖あそ女のこ　たいむるあり男をゑとゝふ

養命ふくろふあやうらん　との俗せるおろかなる祝義あり　初寅の日　西京くるま　ふご卸　初卯の日　住吉　八まん　ふご　ハ指渡そ　ゐ弐天　のとぶとゝよるあり七日あり　十日夷　このもハ指渡そ　ゐ弐天　のとぶとゝよるあり七日あり　茂陵帯の神ゟ　箕面の勝栗　卯杖　初卯の日　槻柳　蒲団のあるうへ　女の思ふ人数多　雨連句　十一日

雖（いへども）　文（ぶん）字（じ）　書（かく）体（たい）　火作（くわさく）　病（やまひ）名（だいみやう）　不（ふ）用（よう）

三句去べし　非用とかりては二句去べし
一句みて持べし　二句ハせず二句去べし
同訓
同訓
一句みて持べし　三句去べし　地名とハちがひあるべし
旅（たび）　二句もつぐ三句去べし　気色と人倫とかりては二句去べし
送（おくる）字　何ごと返す云葉あり　三句去べし
去（さる）ふひハ多あり　指合ハをふを波のごと心得べし　すべて去（さる）ふひハ百数を以て字あさるものなれバ五十数ハ仙初のごとき短きをよりては用捨あるべし

祝（いはひ）ひあり　猟（れふ）　占（うら）　十四日　上元（じやうげん）日　旧（きう）正月十五日をいふ

三保（みほ）の松（まつ）　四忌（しき）　十五日より廿五日まで行ふ浄土宗の法会なり　開（かい）帳（ちやう）

十六日后のおを入れハかざし　孫（まご）　嫁（よめ）入（いり）　十日　これハ妻父入聟入ともするまた公人の名ありそやぶくる日　実家へ入ることあり　六（ろく）入（にち）

お餅花ハ大和の国の初せるよりお年賀しるる者の十六日ハ祝里より行てかるべし　骨（ほね）正月　廿日

茶（ちや）臼（うす）　天皇祭（てんわうさい）　三十日　帝（みかど）分（ぶん）　五壇のお日あり　厄（やく）おとし

返（かへし）儀（ぎ）　鬼（おに）やらひ　大（おほ）豆（まめ）の雑（ざつ）魚（ぎよ）　豆の歌

連（れん）句ハ和訓のひとつあれども俳諧ハ唐詩のふうにありてそ長句短句作用とかりて去（さる）ふひハ俳諧歌の用捨を知（しる）べし

古今抄曰　人倫のさとびハ歌へるより風あるとよるとも歌のさとびより百句ハ百句あるべし　人倫を二句去と定めたるハ紀貫之の伺ふ子て人のさまハみるきもろあれバ父母といひ男女といひ目さち耳たちたる文字の外ハ自他のさうひみるち或ハ物情のたゝひを考へて去（さる）ふの句々と別あるふバ一とあり安ふさ一合の扱とよハぬの指合を心と思ふふ名ハ同下不のおあれども多の字ありそえようとがめ沢をふを一理の九倒とをくし九教おも選字も耳目の悪をえばしてみまのうへふぶむべうぶ比ゆへよ独吟の式ハ俳

ミソサヾイ　鶺鴒

春

早梅（さうばい）　家（いへ）梅（うめ）　実（み）梅（うめ）　梅（うめ）

鶯（うぐひす）　早蕨（さわらび）　実（み）蕨（わらび）

大鱒（たいそん）帝（てい）　匂（にほひ）芝（しば）　非（ひ）　蓉（よう）天（てん）　青帝（せいてい）

木兎　早梅

名と生る名とのくぢりありて一よひらとろ〳〵
用〳〵よあり〳〵用くふあぐる屏風ハかるふ故生る名あ
れと枕ゝせとハ仮名も目たゝく耳目の変といひるその
故を知るときハ我とさるべきあり
月日のお附そへはしお越ふハ御用足るとかろふねバ月
日あふ如月菜月或ハ日あら月あらのあるじめれバ
月のふ生ふ侍者十又歌十三歌あるあるそ調べる
るもさふきもあべ〳〵
一光のうちの月ゑふ同ふ同作の句ハきゑあるべしとぞ
発句ふも雑会ふもとハふる卑滑婦香味の号を除き
て句賀おくやふ作り号あべきあり

○案方

有心　舎釈　迹　七名ハ仕細釈ありと知るべ〳〵

○附方

牛物　牛人　天相　観相　時令　時宜　時冝
面影　先を八作とりあえ題向ハ季句の吟をもかれて
季句の外の姿をえるべし句作りハ季句の月を尋て
季句の内の情をむすぶべ〳〵とそ八躰の外ふ空境と
ふ附くきあり上を先うへのきりものあり作り去後作
るあり　先ふ八箱ふの雪ふおこしと日用のあらはし
を学ぬ〳〵ぐれバ程ふ〳〵くハお後作ちゑふ抄ふ多句
らんあるべ〳〵

○聯句去嫌の事

春と春　句去三句より五句返つく花あき去うしうふ
とべくも先表ふおりべし　裏ふおりて時ハ空月のさりふみ
れバ引場ふあるなり
秋と秋　季ふ同ど月あき秋ハ各用あり作ら五句去
秋ありとふもふ句あるて箱ふハせるすきあり

天皇の即位の日を大切暦ふ
指歩ら留るを以て紀元節とよ

霞　八春ふたゝく　霞の衣
風光　頃気のおこるを
をふくうせあり

氷解る　凍とけ

雪深し　除雪　烟立つ　畑歩　田をすく　蛍　舎衣公子
雁　白ひる　愛鷹　雲雀　雲雀

猫の恋　鰯　魚氷ふ登る　白魚　白魚を釣る　飯蛸

二月　大簇律　立春　雨水中　啓蟄　早春

東皇　東君　紹光　夏正　陽公
発春　献春　首春　王春　規春
初陽　少陽　孟陽　牡陽
睦月

夏と夏　五句去　二句より三句までつゞく平句にてハ一句にて捨てもよし　蕉風に三句まで例あり

冬と冬　夜に同じ

神祇に神祇　三句去　二句もつゞく　其物の雲祇も神祇にて然るべし

釈教に釈教　神祇におなじ

神祇と神祇　三句つゞきてもよし　打越不能

神祇と鈴　通歌　詣　祈　誓　太鼓

神祇と釈教　おなじおなじ

無尽と釈教　三句去　二句もつゞく　悼の雲　退善の雲祇も無尽にありたし

無尽と神祇　二句去　三句つゞきてもよし　無尽と尺教の外神祇と尺教と無尽の類打越ともにさハりなし

恋と恋　三句去　二句より五句までつゞく　但し特しがたき

鍋鶴　初ふな　干鱈　蜆　蜊　酸蛤

其弱　梅　聖梅　八重梅　花の兄　この花　五木の梅　好文木　やり梅　白ひぐさ

柳　まつ柳　風見柳　しだり柳　松の花　いろこどり　川柳　柳の畑　門ぎ柳　いろまつり

初こどり　十ろくりの花　玉江咲　芦のこう　葉なり　角ぐむ芦　芦の角　芦の雉　こうぞ　さいぞ芦　芦のあひえ

蕗の薹　ふきのめ　ふきのしうとめ　防風　鶯菜　茶子の花葉

土筆　其こうじ　獨活　聖巻

于菩　聖天根　芹　田せり　畑せり　根白ぐさ

蓮の根堀　慈姑　黒くるゐ　児花　川原花　ともいふ

ものなれバ先二三句にて捨べし

述懐と述懐　三句去　二句もつゞく

懐旧と懐旧　おなじおなじく

述懐と懐旧　附句ハよし打越を見ふひあるべし

名所と名所　二句去　二句もつゞくなれどもあるひあり

名所と名所　去きふひの論なし　名仙に一ツ百矢に二ツ直べし

植物と植物　三句去　二句もつゞくへし

生類と生類　三句去　二句もつゞくかけて二句去あり

食類と食類　二句去　一句にてすつべし

山類と山類　三句去　二句もつゞく　但し鷲　猿　麻

温泉　山浅　山さち　杣　木樵　なとの類怪きものハ二句去

水辺と水辺　三句去　二句もつゞく　但し井　田　水鳥の類

笠　海士　釣　網　罠　温泉　などの怪きものハ二句去之

罠温泉の二ツハ山類之水辺とあるなり

木の芽　木の芽指　木のめづけ　茶筋　ひもえ　芝生　竹馬

海苔　まのり　あまのり　浦くさのり　さくらのり　若和布　海雲

麻尾菜　水杉　茅竹　日永

佐保姫　たるの花をもよほ紀神　但し神祇にあらず姫といへば恋にあらず　初ぬる花　こぶくさ　す

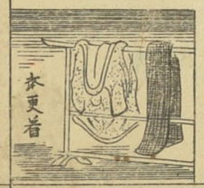
初天神　廿五日　其まけて　たるうけて　其ふ色ぶや　粟

三月

夾鐘律　弩勢　春分中　仲春

陽中　四陽　中和　中陽　春半

花鶴　四十五日　令月　如月　衣更着



衣更着

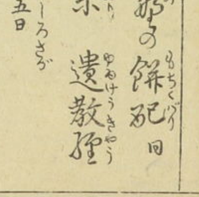
居亦と称ス　三句去二句もつづく　俳ー新垣　産井　笑　琴　簾　窓　背戸あどの数ふるきもの　八二句去あり

陣地と陣取　二句去一句みそ接ぐし　る　雪　雲　雨と　る　ふるふる〜をきふふあり　俳ーるとさめと降りて七句去　五月る　時る　白るあど降りて五句さりあり

雫地を雫ぬ　二句去一句みそ接ぐ〜　俳雲　雰　霞　煙　霧　時雨　多雨のるいあり

天象ふひとしきもの　二句去一句みそ接ぐ〜　俳ー空　中雪　虹　七夕の吐あとの跡あり　天象と八日月星の三光をふあり

時分と時分　二句去二句もつづく　俳ー旦暮朝夜



梅見月　生見の祭　一日　吉野の饌　祀日

歌問祭　初午　祈基祭　遺教経

九日　春楽会　十五日　柱炬火　十五日

苅の祓　旧七日より十四日迄大内良典福寺南大門の芝の上にて祓ふ祓門あるのるざふ衆徒立あるふふあるひるんをふくあじ〜て知〜て月を年比ぶた四方の役者二年づゝねうつとめもと事大内向寺ふた吟ふさしきかり旅人ふあれ薬つゝ手ねた吟ふそかりをたさふねうふそ祓をつとむる祓ふ

二月堂の行　堂ふみふあるき井あり一日より十五日まで行ひの日炬火たをるる有

洗面祭　旧廿日　献生ふ　一日支野おてまるき袋ふ五ふの枝を入て納るるそぞ

乃ふうるふ祭　旧廿五日　廣田祭　初申両家　宇佐祭

雷あどのるいあり

風作と風作　二句去一句みそ接ぐし　俳ー輔　帆　息の風　風　磨笑　先おハるふ風作あり

雪作と雪作　二句去一句みそ接ぐ〜　俳ー詰ふ　連

流の吟雪作あり

病作と病作　二句去一句みそ接ぐし　俳ー

狩ふと狩ふ　三句去　二句もつづく　俳ー嵐　狐　洛内　姉ぐり　雷　眠の吟　さゝく　暁あどの数ふるきもの八二句さりあり

芸能と芸能　二句去一句みそ接ぐし

人倫と人倫　琴　碁　書　画　俳　何みても二句去

二句もつづく

人倫人情のさばき好心ある者　人情八何句みても二句去

句ぐ〜　他門ふ人倫　人倫ふあふさふの語あれども自他

后のひんハ秋あり

るとハ社日ふ降るをふ　二日灸　社日ふ半ふ二日あふでハあく依て二日とふ後世毎月二日のまとゐるハ偽りふ

十六日　琵琶法師これを修ふ光孝天皇の皇女の忌日あり

十六日　琵琶法師の皮定るより

初雷　焼野　蕨の焼糸　虎杖

水葱摘　花ハ夏あり　蕨　狗脊

考ふあり　十六日　釈典　旧二月七丁日八月下丁日考秋あり　後釈典ハ秋あり　文室王　彰子二度九哲もかぶるあり

踊念仏　涅槃会　旧十五日　彼岸　中ふり三日あり　時ハ春ふ

社日　春ふあ日の戌日あり　社日蒔春ふとふ秋あるとふ

考季皇霊祭　ま春の神殿祭　廿一日

の年みて人倫人情をうつす蒼風の翠ひもゝく 俗ニ錦
うり人倫あり錦うる人情あり皆みな此ます知るべき
あり他門の論あらざれ用ひべからざるとあり
旅作と旅作　二句去　二句もつづく
歩行作　二句去　二句つづきてもよしとえども是
もうらひあるべし
手の業　同
衣作と衣作　二句去一句あれ接べし
職分の呼　二句去二句もつづく俗あるべし
交易の呼　二句去一句あれ接べし　売と買と表
きらふ　売と買折をきらふ
同字　二句去者別ありて別作句をしらざれ
お越ようこそ　かく俗ニ見物居立喜
多呼先来向　是あるの数多くきよ云の上之

拘杞　五加木　連翹　銀杏の花　擒木つき穂
紛ざるゝ　彼岸ざくら　紅梅　八重梅　鳰雁
蛇穴を出る　蛙　蟄虫　蜂　似我蜂の巣
蛇　かはるゝ　蛻　蚕の子　松花多
引鶯　引鴨　多の巣　多の古巣　雲雀

蕨　雲雀乃巣

蛤　馬刀貝　田螺

四月

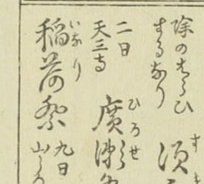
五旬　姑洗律　清明節　穀雨中　黍苗　蚕の角巻
栽場　竹秋　殿春　残春　暮春　蚕蛻
病月　初月　暮月　抓浪　楸月
花見月　弥生　老情月　傷暮
花冠　片花

郷書如　二句去二句もつづきてもよし
重字　同じ　俗ニちかく　むかしく校二字ある
うりて八俗ニ越よし
聯句去嫌連句七句去のあを五句去のものを三句去ゝ定めさる是余八准ニて知るべきあり
○聯句心得のすべ
非孤　釈教　為客　述懐　懐旧　名おゐる名
病作　七名　此十品初表ゝきらふ心得べし
俗ニ七名八用捨の心得あり
余抱のすべ
つる句　舟筏　鞏　操　輿　牛車
右ハ二句去とえども如ゝ鞏又操ふ製るおどうりて
去きらひおよびまた
多聚の数　紫山子　唱子　引抜　多おどし

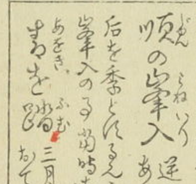
猪子の歯生鈴木二旬去と又ども楽山子ゐ松る
牛ゐ引板あとの鈴去蛭句
生鈴ゐ蝙蝠 納 絹 畢 る士 牛士 博士
猟ゐ赤むも二旬去

○二季ゐ子ら
出代 義入 彼岸 掌入 釈る孔子祭り
去秋ゐり当ゐひるく之
給 百匁 祭 去秋之ゐ旬ゐ引をあり。
○当旬ゐ 百 ゐ仙ゐ二つ百文ゐ二つ半りあるべし
短句ゐ 百文ゐ二つあるべし
当で 百 二旬去当短祭りて八二旬去てあるべし
短句ゐ 百 ゐ仙ゐひとつ百文ゐ二つ半り
これ八旬立ものあれバあり
つ。
百 当短ゐりて ゐ仙ゐ一つ百文ゐ二つ半り

大和祭 大和 一日 松尾祭 山ゐろ 二日 平野祭 同上
弥武天皇祭 三日 梅宮祭 大和 三日 上巳 旧三旬
抱且 三重 鮒 大阪 蛯 同上 梅酒 京
菖蒲 曲水宴 三日 已のゐ祭 ○川上ゐり祭をゐび
川下ゐて祭ゐあり
ゐ仙ゐ 汐干の祓 同上 闘鶏 三日 縁仏喪
二日 虎渓祭 旧日 大和 務田祭 同上 大神祭 山ゐろ 九日
稲荷祭 九日 高雄法華会 旧十日 日吉祭



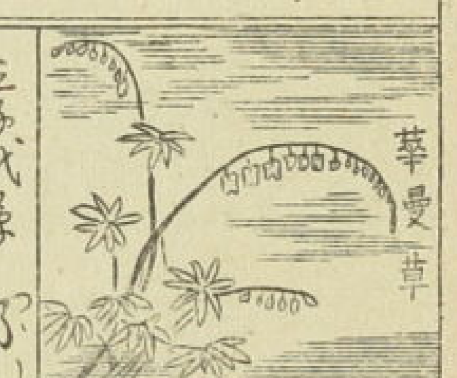
十日 迎ひ 若子祭 旧十四日 吉野の舎弐 旧十日
壬生祭 旧十四日より 加茂祭 十五日 山ゐろ 吉田祭
十八日 祇園大念仏 旧十五日 ゐ仏念仏 ゐ中の祭
ろふをむる
招若猪 旧十五日 東京
人丸忌 十八日 四条拭 十九日 山ゐろさがの釈迦汗
あがるをめふとふ
洗茶祭 旧十八日 高雄女猪 旧廿一日
仏神ゐ祭 ゐ仏ゐ出るを俗ゐ汗とふとぞ
順の掌入 逆のふね入八秋あり 掌入と八秋。一年二度
あるものハゐね猪を春のとすれども掌入ハり
后を春とふるふの
掌入の日始なし
ゐ祭 仏 旧廿一日 当ゐ会家ゐあり
紀ゐる時山ゐろ
まる生 踏 三月二日 山ゐふ
ゐそあそぶあり



玉蟾　桂男　玉の影　弓張　桂の花
宵ハまだ越ぶ秋ぶ出る月ハ　夕月　夕月夜　二十日月　入ハ夜ふか
あり　入月　朝の月　暁の月　昼の月　午時の月　残る月
明かる月などあり○宵ハ月の出ぬ頃ゆゑ時分にて出さる
月ハ　月の出　月待　月の名ぶ　名すし月など詠ぶ詠
かをまぬうるもあり　○宵闇とハ月出ぬくバ宵ぶ月の句
をすべし　花句ぶ例あり　○月並の月の未出ざれバ宵
を近く心来ぶ月をすべし　月並の月　早月夜月みり
あらば

○こぼれ月の事

春の日
松風ふこぼれぬほどの酒の酔　羽笠
突揺しきる虫もなし　月　執筆
炭九ぶ
黍の穂ハ蹴ふに風ぶふきこぼれ　野坡
る坊の笠笄のあとぶすむ月　岱宅


華曼草

彼岸ざくら　緋ざくら　姥ざくら　おかめのさくら　虎ざくら
うづざくら　かばざくら　老木のさくら　雲井ざくら　人丸ざくら
手まりざくら　糸ざくら　あさぎざくら　かざし艸　花
ふげんざくら　江戸ざくら　吉野ざくら　深山ざくら
もろ花　花ざかり　花見　花のむしろ　桃(もゝ)　桃もゝ
花の花　彼の花　花莚　花むしろ　桃の節
二子代草
ゑきごうき　躑躅(つゝじ)　白つゝじ　赤熊つゝじ　岩つゝじ　藤(ふぢ)　白ふぢ
きりしまつゝじ　小式部つゝじ　きり島つゝじ　ぬくふぢ
きしのふぢ　ふぢろろふ　ふぢの下かげ　山吹(やまぶき)　いえぬ花
ふぢだな　ふぢあらし　ふじのあぢ　黄金の花　かきのとう
蓮珠(れんせん)　蓮ふ似てちいさきあくさあり　けまん草(さう)　蔓牡丹とい ふ　花ハ蔓　葉ハぼたん
み似　海棠(かいどう)　ねぶれる花　山梨(やまなし)　浦なしの花
うり　かぶなし　梨の花　わのつぼみ
木蘭(もくれん)　木蓮とも　大山蓮
玉帯花(きよくたい)　林檎(りんご)の花

大山蓮

花こぼれ月の古式あり　こぼれ月ハ打端ふ月をいるゝす
あり　月といふ字をかくのめぐ機ふ出て名句る月ふ影
映る月など　句の月ふゑんのつゞきたるハあしく出放つ
月掛をうつ月などく月の字の縁をたちて心ふ縁を続
けて月といふ字を機ふおくことなり
猿みの　此夜も要をくゞる破あかき。　芭蕉
醤油搾させて去りし月みる　猿雖
古集ふかくのめぐのこぼれ月もあれど古式をなるべきなり
○花の定座の事
定座のあこしふ機雑花をよまるべし　前後人花を信
あるの句出るふんときハ素ふ引あけ短句ふ花をはぶ
定座を引あけてつるあとゆゝ　こぼれ花ハせぬるを
たるべし　古人もろく申されしとぞ　○定座の花
二句前ふ前き植めの出るバ根のあき花をはぶすべし

石楠花

杏花(からもゝ)　あんずの花とも　石楠花(しやくなげ)　木瓜(ぼけ)の花　くさぼけ　うらぼけ
小てまり　櫻の花　胡桃(くるみ)花　李(すもゝ)の花
楊梅花(やまもゝ)　萬代樹(かいらうぐ)　ちや巳(ちやよし)　犬(いぬ)ざくら
金錢花(きんせんくわ)　丁子草(ちやうじ)　金鳳花(きんぽうげ)
櫻草(さくらさう)　あなもみ　金盞花(きんせんのなか)　紫(むらさき)蘭
菫(すみれ)　花すみれ　つぼすみれ
七星草(あへ)
水踏の花(うぶぶき)　九輪草(くりんさう)　春菊(しゆんきく)　あげまきくとも
通草花(あけび)　山女花(あけび)とも　母子草(はゝこくさ)　三月菜(な)
苔竜の竹(ほうがさけ)　山葵(わさび)　苣(ちさ)　唐苣(からちさ)

花

四月

花の精　花鬘　花盛　花ぐもり　花敷　花莚　花ござ　花守　花人　花衣　花笠　花蔓　花の雨　灯花　（花八初の字とて字を入て画ものり）　○古人曰花八櫻とうたて多と斗り侘しび櫻花とありても梅花あり〳〵花八一折の花と侘しび花よ萩の花芥子の花の字三句共花の葉ものあり〳〵春一句のはなぞうとして春ものも秋ものべ一残る花ぞ花や秋暮ぞ

○名ある名ありを詠るう

深川集　深川八女もりの下やしき　洒堂
伏見の城を入あるきく　曲翠
下総ぬ此度八毋のおうひの才処山　許六
魔分の温泉をしかえれ　李由

菓苞　菓揃　菓揃　菓子梁
掬鯛　菓舘　小舘　小舘ほ　さゝら鍼
麦藁　麦藁　田嵐ぱして藁とあるもう
菓の月　菓の噂　菓子
八十八夜　忘れ雲　菓の名残　引残る藁　燻塞
囲炉裏塞　こころ塞
苗代　種まき　種おろし　種ある
菓の弦　菓衣　菓衣　菓のまる
行春　菓まる　菓まて　菓深き

五月

深川集　猫の恋ふのあひのうち初て　荒菓
くるまきやく宮川の上　荒菓
きうふ夜や暁の月　菊
数ならぬ伽根をうつ　風宿　菓を
名ある名ありを甘るハ比もものきを味ふべし
花ふ春ものとふあるく、吉野ふ花ハ昔しおくびの月も
暁待山ふ月とハよし一月ふ暁待山とハよしかよし

○四季を打ぬのうち
月雪ハ貴賤のおのおのて家仙ふ三二百文ふ七百文
も准して貴賤のもの史打ぬふ出してうたしうたび
家為考貴ふもあけれどもたとくのものあれバうたし
かうばふ仙ふ二ツ百文ふうけりも出べし一
俳諧一座ふ梅　康為角　宝暦　丁酉ノあとの
歳季を記そハよし

五月　仲呂律　立夏　芒　小満　中　孟夏
初夏　首夏　早夏　孟夏　純陽　清和
余月　卯月　乾月　猶月　卯空月

○發音三の部

發八字發を定めて後疑句を立べし一字發を幾ン
重も武あれど句意とくあるみときハ上下の倫あり
さるゝ八九字句ゝみもあるゝ柳ヶ車　菊
巻のうら河の雨ほる　夢　汽圖
元ら物の字發をさためるあり
ほり集　芥捨や水田のくゝの秋のやど　酒壺
夢かくる日ゝ代ある丁　巻竹
元奏句ゝ物の出たるゆゝふ時分を字發ゝ定めるゝ
炭俵　捨ゝ馬ゝの何と日の当る山吹哉　菊
ところ〳〵ふき〳〵の咲くろ　野坡
元奏句ゝ物も時分も出るゆゝふ時分ゝを合せるゝ
猿こ　市中ハ物の句ひや夜の月　丸舩
ありしくとゝくの夢　菊

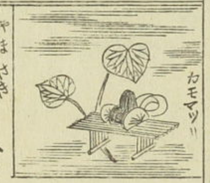
五月　日をあめ先てほしき五川　菊
岩ゝ宮をつるぐゝ　杭　一茶
元ゝ添の發あり　ゝ添と八発と云句ゝ部話宮
あどつくるを云　修〳〵倫と云句ゝ部話宮
ハよ〳〵ゝと云句ゝ油川ハ発付あり〳〵話句
あもむさを勿べ〳〵

○発三の部
宇陀法印陽ゝ発納の牛の抗めて　菊
あの日　野ゝ集おそる発する蝶の羽折て　〃
蚤衆の葉を初物人のゝふ見て　野ゝ
とゝふ山　ゝる衣の用ゝするゝんゝを捨て　発ゝ
ひさご　雨降ゝす猿のゝ見捨せて　泥土
止ぴ　とめるあり
あゝの
蚊柱し東ハ琵琶のかさきゝて　野ゝ

ラワン仏

孟夏旬　旧一日天ゝより群ゐく　文衣
扇を給ゝ各別鮮あり　衣の色ゝ衣
白を　あをすゞれ　ゝ麦　給　紗給
巧麻ゝ発　一日近ゐ○発ヶ明神氏ゐの女ども松ゝし
ゐる男のゝゝほど強をうゝうゝるゝあゝん
故ゝあゝべゝありともゝ云ゝうかゝゝべゝさをうゝうゝて
かゝれゝばかゝふゝとゝ付てゝあれゝとゝうゝ今ハ発
菓蛇発　五日　灌佛　旧八日　仏生会　竜花会　灌仏　仏のうぶゆ　神衣発
旧十日　麻猿連とゝ人麻をうゝみ　水発能　旧三日四日五日
ゝの衣を織仔神ゝよけんゝ　ちゝ良ゝ考日
中ゐひめの　當麻法ゝ　十四日　大和
易日ありう　加茂発　旧中ゐ日　葵祭　葵うゝふ　もろうゝふ
山〳〵ゝ山〳〵ゝ　ゝゐれのひ　ゝうゝと牛り　千団ゝ
出てゝも発ゝ成ゝあり　十六日　三井ゐ
鬼ゝ女神ゝ信

ニハマ


カモマツ

山城祭　八日　日光祭　旧十七日　地主祭　旧十七日
近ゐ　平野祭　旧上申　旧十七日紀伊　八瀬祭　旧辰日　山城ほうあ　ゝ家祭
杜本祭　同上　山ゝ　嵯峨祭　山ゝろ　三枝祭
梅宮祭　同上　幸川発をゝ　八幡祭　中卯　向明神祭　中辰
大津祭　上の変　山城日使　旧三日　近ゐ　山ゝ　多ゝ天祭　二午
上の卯　平安天神祭　上午
久世祭　旧中巳　山ゝろ　山科祭　上巳　住吉卯祭
上の卯　梅津　菊宗祭　上酉　春祭　中申　山王祭　日

菅宮祭 甲午 虎杖くらべ 郭公 中申

大塔宮 大坂天王寺 しゃ歌 まち乗馬

花供 廿二日 弓堅大ゆの衣をまるあり 蓉の跡み入 とやたら

ほとゝぎす 時鳥 第一番 ふめ咽 習魂 勧農鳥 まち待 山時鳥 杜宇 杜鵑 擂鳥 忘れ草

ぶん廻る 物鶏とも まち鳴

ほうろく 子よ 炮烙 投頭 放とんぼう

くも蛛の子 蚯蚓出 蚤 蚊遣火 蝿 蚋 蛭

放をしる虫 蚊 蚊遣火 蝿 蚋 蛭

ぶんぶん 蚊あり 上ようらひのことばをまねし

先ありくとハとまらぶ うたゞひのことばとハ

いろ〳〵 いく たれ たそ かハあそ

伝 先ふのことばをよろあくべし

あふぎを 水筒 瘧 あとうくふん 文文

きるふ やまひ 病 おこり 土もつ ひまもれや 蚤

先やとめあり

みうらぶの 絵 絵 蚤 蚤

先もあり。 蚊あり。 もあり。 蚊刺 あり

あり 名のたけ 名のおさまりをうるべし 発句十分の

位 初五分の位 中三七分の位あり と思ふ 名れの蚊あるもせよ たゞけたりく 季三作 おつくべし

今の日 先棘ある骨の魚よ 咲くり 杜国

先五文字 仮名の季三あり 又文字 仮名の季三ハ 名れ

上下の五文字 をみなへしなどの 名をすゆるも

仮字 門松 仮の字 門の松をてをハ入るハ悪し、

蚤の蝶 庵の袋角 初鰹 うの花 鳴鳥 絨 鰹節 蚤附

老蚤 卯の花 反未立 緑毛

蚤 蚤 蚤

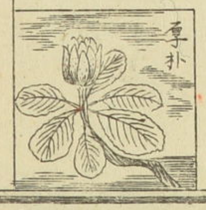
のくるまそ 蚤ばの毛 蚤葉 しるるバ 拝る毛 拝の毛 一八

桐の毛 毛抽 招 穀の毛 草木の毛

穀持 桜の実 名を芭蕉 紙衣 ひらぎぬ

擂 薯蕷 牡丹 廿日草 毛主

名とう草 ふうこぐさ 萄 菜 えひす草 毛の字あ 菱 二葉ぐさ



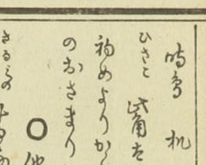
時多　机　簟　あらのでぶぞ入ざる文字を書べし
ひさご　箭をのろくかく事　珍頌
初めよりかくまでその入ハよ　これも白うち一句
のおさまりをおもふべし

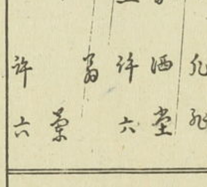
○他季こゝろのまゝ

さるの　学ありくる墨絵おもしろく秋そよぐ　史邨
ささきころときめくや竹の夏衣　允旭
ろくのおろハ花のつぼむころ　去来
納めての文庫の文ハ行ころき　允旭

浜川集

洗足と答ふ春のつく雪うお　西堂
綿被あふ夢むきの里　許六
鯖鮨陸よの路を作へ来て　富
ありなるく文稿もたり　葉
月の色水も踊るふ納うり　許六





踊子　蘭の花　石こゝ七　苔の花
岩梨の花　蓼引草　蚊遣草
風車　蛍火草　蜀黍の花　もろこ木
白丁花　蚕飼　牡薬　麦秋　ろふ葉
海藻あり　お葉のめくまくあり　ろふ葉
たるも又くちて苔こたるをよ
蕗　玉巻葛　茨花　雲実　筍
なくるか　初茄子　豆稔る　根芋
牛のよ
飯一茨ぼし　ときハぎ木の葉　松杉　捨樫
おすし　名なり　葉

六月

雞寅　律　芒種　節　夏至　中　仲夏　盛夏
蒹葭　茂林　敦牂　蒲月　午月　皐月
鶉月　橘月　早苗月　早月

簟　他季の典薬の　酒堂
相国も牡丹の花のさうみて　衆
椀の蓋とる　芭蕉
新八句のうち雑の句あきみそ　ろべしむなむむと
おハあふぐに一花のもやうみてるなみ三四句仙
一おニおろろべし

○三物の解

発句ほうく　脇ハ五作者三句二作あり　第三まてを三つめとよ
ハ四時の景物よ對して一物あきおよ情を起して十七字よ
清しよ是発句あり　文と八発句ハ物もせよ
もせよ句ハ打添て成ハ物を文吟詠を分て発句
よ云ハ　たるおを補ふものうて詞ろるの心あり
物とハ発句脇を一連のおの句とあり　天地より人の生し
て万物ろるごとく又発句より一起すれバ脇を脇句

六月

みせん三句の懐旧やうやう重をよとん四句目ハ今の俤あらん百歳が仙の袂ものあれバ詩の捨と遠ふて変みおひあり詩の起句智とハ

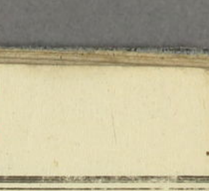
薄暮層巒遠腰　傾盆一雨定明朝

老翁八十眉如雪　立抜渓辺猟木橋

此句の心ハタ暮うさ立あふびたる山々の腰をそのめぐる風情ありうて多を傾けるほどの雨が明朝晴ると之老発句と翁の一情あり唐三体詩の日和る也をうる八十の翁ありかくのごく発句猟の情を得て玄情二句つゞハ人ゝおもひ入情二句来ふハ風流味深ゝあゝ一時にするあり狩古人の三句よ上美まし

こんみやくふくくうぬ妻緑石菜花

吸ふふるゝ妻の雪もあ



丹生川上祭一日　賀茂祭中の酉日　梅宮祭中の卯日

神宮月次祭日日　御巾帛発遣日　菖且旧菖

端午　幟　菖蒲うち　菖蒲さるさき　菖蒲刀　同人形

菓子　菓子鵜　菓子鶴　粽　茅日旧五日

菖の節供　菖蒲の節供　菖蒲湯　菓子　菓子鶴　菓子鶴

百草を残して菖蒲湯を浴ふ　粽　茅日旧五日

猟射　五日を近のものつゐ市近のものつひとる

猟射　五日の晨をひをうの日とりん

かつ馬競る　くらべる　さほひる　水る　五日

廿一日　尾張　有名の日　旧廿五日　村上て白ふ名日氏日吹礼ゐて終日侍奏あり侍奏ありてお叶すあれバ奏ふる之依て侍奏あり又あーとものくろあろとぞ

住吉祭　旧初午　住吉田植　旧廿八日　山田田植　旧

八坂御輿洗　旧　虎が涙雨　旧廿八日

帝中八御の白ひやえの月　大祓　三十日

門涼　ふるしくと門くの多

宮猟祓　清浄祓ゐ　三まん多ふゐも多ふ祓ゐ

住吉祭　旧初午　宝夏生　五月雨

おそふさ　丹後多ふ御祓生の井村吉依のふへ多ふするのをふあり　初日戎

鳥車　あのお渡をあふ　そひまりるえ　五日　生玉流鏑馬　五日

布袋打　伊勢山川祭　旧八日　山田宮川近毎年　廿餘を二千三百三十五

八坂祭　十五日　札幌祭　十五日　石狩　熟田祭

蓴菜（ぬなは）　蓴菜（じゅんさい）

蓴のつの　蓴のおの葉を湯に入れ出したる

きりぎりす　秋の来ると鳴く

秋の来　来ると人にいふ

赤ふ草　赤く咲く草

谷川　谷の川

髣髴（ほのか）　ほのかに見ゆる

神代（かみよ）　神代の時

蓴人（ぬなはとり）　蓴を採る人

蓴採（ぬなはとり）　蓴を採ること

指三本（さすさんぼん）　三本の指

蓴のつの　蓴のおの葉を湯に入れ出したる

きりぎりす　秋の来ると鳴く

秋の来　来ると人にいふ

赤ふ草　赤く咲く草

谷川　谷の川

髣髴（ほのか）　ほのかに見ゆる

神代（かみよ）　神代の時

蓴人（ぬなはとり）　蓴を採る人

蓴採（ぬなはとり）　蓴を採ること

指三本（さすさんぼん）　三本の指

○ただこと多き人

○口ひろめよう揚句きそはうあと遠そ附句ハチビ万化あり地曝皮肉腎の習ひあり前句を耳下ぎだして眼あるべし物ときハ形あり付ざきものおこしあきあり心あり心もひそうとろろうのたぐひありたとへバ

ぜんまいのやうなたこ多くあり

あまくさるぜんまいのお物上さうきれバぜんまいのやうなを耳ふきうばして目あるそうときハ音あり心あり前句を耳下ぎだして逆廉の物多あるどろろうろんかの蕨のやうなをみばまともいうるものゆるざ出たる風情あるんう又

ひきだるやうお明たこと多

使若くそく小坊そうろう掃あろう

五月雨　入梅　微雨　梅の雨　まる梅　梅ぼし　梅づけ

入梅杉　梅多く咲の堤四五本ありて入梅ふかくなれバ又えのごとくまっくろに成とりあへず

枇杷　生胡桃　まる山椒　栗の実

棟の花　せんぐん　南天の花

楝の花　合歓の花　梔の花　杉楠の花

羽抜鶏　羽根の生かわるる時

鵜舌を去　鵜のとりを去ればくものをふとん

深菓　鳴の巣　初雁　雁のこゑ聞て麦をとる

蒸羽衆　簗打　鮎　鮒　鯛

鱓　蛇のまろげふ条を　蝸牛　蜘蛛生

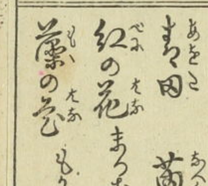
蛇衣を脱　蝶の初多　蚯　蚓

蝮　毛虫　百合　鬼ゆり　蔕のよゆり　麦刈

霞多子　田植　田草取　ほ苗　ほ乙女

紅の花　まろむ花　菖蒲　高草花

藁の花　今年銀花



仍某候の使者の名の掃除句上下あるべきようあり

狼のふる毛のさげたるさま

花きゝハ歩実倫子ふれ　づきん

作庭まハりの尼公つき添切禿やうの者のさげたるたぐひ多の飛儀あり

換灯ーめの大たぐひ　多至

鍬うけて柏葉あらまし　今朝

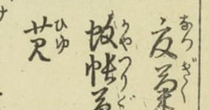
至一志きうの香眼ふゆるされよる西まめのこゝせさきあり

換りだゝけの提たぐひ　多至

葬くてさあ後バあれ吹バわけ

金屋ものゝ換ゝふけあるハあきうく仕舞たる形あるべし

換りたゝけの塗たぐひ　多至



麦秋のうちハ作者のあげ句

同ーほうたふけあゞふ塗たぐひ多至とあれハ凡ほかをうて四今ありどの麦秋をもあるべきう拠どたゞとほんと耳ふゆまれハ只一色あゞふ目あるるれハ一つゝふうりて付句もそれふうゞふべし

○葉ハきとあく綾とあく只一情あゞふあかもの遥葉あり西葉あて多至ありぎる葉あり俳諧の付句とても上中下初中後あきふーもあるべし

上ふ

来へき句とて夕雑の物

しろゝ焼の探姫あゞきめて

上高の人借ふ夕化粧あり我せこが来べき月

七月

林鐘律　小暑　大暑中　季夏　蝿月

晩夏　永夏　六陽　瓜期　且月　二冷

陽氷　氷室月　実冬月　風祭月

為夏月　精霊　涼秋月

建勲祭　一日山ーろ伝左公　賜氷日　旧一日　氷の貢　同　氷室　もろ

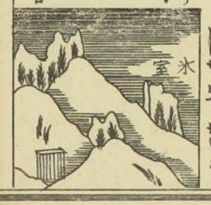
氷餅祝　同　一荻酒　靖国社角觝　七日　東京　西士俗旧

もろ廿日迄　六月会　旧旧日天台宗　祇園会　旧七日市社よりは条多祭の仏旅あきそこしを出ーまる

ふての山降まる十四日雑くの出羽海まるうんかの祭十五日　安房祭　十日　吐俳の祝ト

神祇官の官人多作ふ情あんことをよて妻乞まる今祭ハ

津島祭　旧十四日　西まろうまて　氷船灯　鞍馬竹切　廿日



ありさくおふの物のふるまひうねてろろ〜もとめ
近つ辺あまとのあごさめやたる人らの春の風情も
あ〜ふんう

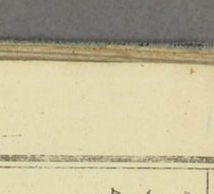
中五

はつ雪白の柿うれ〜

曙かりふ来るまふ芝を持あゞ
川竹の風情あり氏みの返りるいうおも姉め中友
どゐさ〜やきたる年波のありさまあふんいろ〳〵の
中ゐまことありて中五の景といそんう

下五

四うくふ色の白さ雁人
雨風吾よあさ汝馬と葉馬と
ろハをごまき麻の糸思ひ合せてよるさかうと
麦つき吹の鄙ありり馬をを衣澤やもめ女の



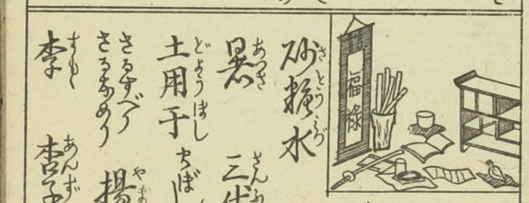
千日詣 旧廿四日　摺立祭 旧廿五日 唐崎祭 旧三十日 近江　住吉祭 旧廿九日
加茂御祭月 旧 雑太祭 旧卜部氏これを行ふ 夜神楽
大祓 今の暦六月三十日 雷の陣 雷多き三夜吗ハ大祓ます 近江の
次第まで弓矢を帯し此祓の際ひさし木偶候
ーて弘伸をも被ーまるあり今廃ゐ
の筆　納涼　四条の涼 山ーろ 旧七日ろ

雇人ろる久飽せふるろゐゐぬ日八内で馬やる」と
いくる付もひあ〜ろろ

○初恵

神やふれてもそぬ初恵
ちろ子のもやろも紀ろのをー〜ろる
もろ子の林よりあろ〜ろ新〜ろあろめたるあどあき
恵あり中さろ初る女もさくめきたる恵ばの
ういまされと附ろう

父母愛女女　女是聰明子
生不識鴛鴦　傍出鴛鴦是



砂撮水　菅笠　さびし井　雷　扱暑
暑　二伏　丑の日土用干　さびし　猪の姿　扱すきる
土用干　揚梅の実　林檎　早桃
李　書ろ　夕影　梅子の姿 川東
百日紅

十八日まで川の中ホ床を
並べて遊びたり むあり
旧十九日 加宝銭 祇園帝陽祇の時宋の加宝銭
十六文を以て此日御修を被ー後
午刻を目ゆ
清のう　風薫る　両方の涼　座敷涼

中伏とよ立秋のもーつの庚を末伏といふ故ゐ三伏あり
去むの后中ゐこの庚の日を初伏とよ次ゐの庚の日を

裂て捨るが好起清あり
吉糸をとろふの髪ホ揺ゐし

きのふ妙齢のあるあるそようもなきの女袖の突あふんとするめ給ふを含んでやの男左云ふ

○渡 馬

抗のあごを解てあくさむ

髪結と幽灵ひとりあり

楊木妃くつて唐帝のおもひ李夫人去て漢皇のあさけとありしる日の徒花あ〳〵ハうの反魂の草うもあふまぼろしそう狩馬の姿猪止ら種おそし

くし依てそゞ徒集の中よう投 ひとれを

ようくてユまそくきあり

ある さまざまおろかなる歩をして

附 浮世のそそハこるおゝ町あり

人のよう〳〵援のうゝ施楼るごとくさまざまおろかなる馬ふ子の果のあそはしきをいまめさる附之

ある 附 ある 附 ある 附 ある 附 ある 附 ある 附

芋をもてこぶ箱中の蛇

此馬ハ先ゞ今馬を待そろり

まそそくそよう〳〵被の迦陵頻

眼境くそる馬もまるく

我ものおもひ浪を一人

此馬をらんとすれバ吃あて

浩て仕舞と跡ハ捨られば

下駄の結ひめするきまれ仲

我筆ふあり形と娘盗ふ〳〵

馬ふ吸ふ〳〵とひの友達

もめ使の叱返てのをまり

かくし髪思あうとおも論ずきん

口紅彩すぎ石仏のうゝ

唖の馬囲こぼ〳〵て見せあけり

あま鞠簟 くまびき うぐひす

うぐひ艸 ツリカ木草

父お掴の毛 盧舵草 千日紅 菊の花

陸蒸 樊噲草 虎尾草 豚の毛

川骨 浮浮 警草 麒麟子

皺子芸 至新 まる鬼灯 蕎つれあ〳〵くさ 海松

荒和布 凌霄のぜう 紫蘇 蓼の〳〵さ

菅刈 螢刈 まる薑撫し 南瓜

竹の皮脱 日傘 帷子

骨ともお料理するをよふあり

扇 団扇 そぶ うちハ

牛蛞人 簟 竹奴

石る条 旧六月廿八日あゝ大山あびう奥の院石ん大ぐげ参詣の人本太刀を腰

醤油造 簟 抱簟

洗鯉 洗鯉 鋳物 海月とる 竹奴

栄螺 栄螺飾 栄螺 栄螺 栄螺

神の宝在 毛を むしる 栄螺 栄螺

利鎌 旧七月十五日 さゝバ竹ぶ 萩簾 蟷螂

盆 盆 盆 盆 盆

海月 海月 海月 海月 海月

槽 槽 槽 槽 槽

蛸 蛸 蛸 蛸 蛸

蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛

蜘蛛の糸網 大昆の子ら魚の網 さゝうやうふ縁の美称

まる ぎし まるぎし まるぎし まるぎし

あそつる あそつる あそつる あそつる あそつる

おの句　俤慕とのをかあーふひ
付　疱瘡神のふ髪掩もの服
おの句　おとろふ朽葉每日の古狐
付　封もせまく師直の条

○附合云俄

○寄合　おの句ふ對して題句を定るなり
○句作　おの句お對して新古虚実のなり
○てふも　おの句對して技形のなり

○附合四品

○将　おの句の人情あるひハ事物の一特の故の付句おのおのあるべし
○随　おの句の姿情を動さゞるやうあるべし
○放　おの句ふ對して風色を暖れり　の働をとるべし
○逆　おの句の姿情を足ず一ふくハ技てる付となるべし

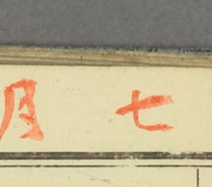
執中法のなり

○芭蕉翁廿五ヶ条の内附句ふ執中　三義の内の法あり

執中とハ中をとるといふことなり業方肝要とせり原氏ものうくうりあどの大部なるあもハ原ケの左迂より筆をたてくおほハ技巧ありとそ洋溢程の五段づきもまた三段めのおもしろきおを作してさて初段ハ実ものゝ附句もたのごとくおの句お對して附へをものハ一字三字おおハすぎゞ名をふくされバ句お向て遊句を求るなりおそし又おして執中の法を用ゆべし上一ふ二字おておもを加へくもしくハちがめもして二句連珠体るととゝえ附句ハ蓮の葉を句そなりて中ふ条を引がどとく情の通ひたるを上手とゝつゝねりとゝいふもこの心なりや

一　新技のうふを肉桂（かつら）

附ハ条の一なり　新ハ実発一をいふなり　桂ハ月の中に生ずるふ木なりとゝ



秋
旻天　少皞　金帝　西北　川狩　炬燵　蕙衣　冷麦
白露　金商　素秋　夜の雪　秋近き　魚蒙雲　拭把葉
八月　夷則律　立秋　変暑　冷麦
相秋　素秋　初秋　首秋　上秋　夜の別
新秋　早秋　蒼秋　桐月　晩中　爽籟　収日上　昏日非

女郎花月　涼月　文月　久ひさげ月

氷川祭一日　武蔵　小鷺祭四日　山ろ　大宮祭十三日　泉府　男山祭十五日　山ろ
鹿児島祭日　大隅　名和祭日　伯耆　三嶋祭十六日　伊豆　鹿島祭
廿八日考度　気比祭廿日　越後　諏訪祭廿日　信濃　筑紫祭廿五日　筑前
七夕　星祭　牽牛　織女　二星　るり姫　星の女白　七夕食
灰洗　扒洗　天の川　銀河　銀漢　天河　星合ことばの川　浪まくら　を漢
鵲の橋　紅葉橋　書迎船
乞巧奠　乞巧針　七夕の針お授くの条を通ふ名なり

付 老の一年　賢の御髪をかき撫で付くり

付かる事　子孫を招て人の名を問

　　市場ゟ出ルバ有のくかとまつり

　　此秋も門の仮むしろかな

附方迚　　救をふもれそひとり乏る月

　　呼よおとろ〳〵先萩の宮

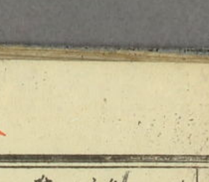
付　章今書　盆人ゟつれそよ書の字を広て

　　附句ゟ季をむすぶ

○附句の考うつり秋うつりゟむて初心の人先季立より案ずるまよろてお句の全体ゟ附ず季ハ季句のこをうゐて附ハ側の執中あり又ゟ三句おもくとうたる時ハ季の立引うみてましるこを結ハ季ゟ一句あるべし

牛飼集ゟ抜白　鬼のやうあるやりてさ迄

　　焼飯のをもすうるといあくべ



七種の籾　籾を吟じ水をそゝぎ七夕ゟを句ゟあり

　　萩桔梗尾花葛花女郎花藤袴

　　これを秋の七くさといふ

池の坊七夕の立花　七箇の池七番のあゟ

　　はをこゝろに　梶の葉

水門俳筆若布　若布の使天ゟう法度く　延の栄入南山七月

　　勅使を立ふるゝ

中山八月　文錬舎旧八日　六乙集旧九日　聖霊の迎提　拘待　門

　　ともゟ健者の人ゟ

　　多をあつまりあり

　　の句をそへ

　　其だあくべし

盆市　迎火　霊棚

清あ千日業旧十日　揺買六乙集

盆のつと入旧　伊勢山田をそへの遠き苞

　　を結ふして宮地を乙ふる

お撲　送り火

中元旧十五日　三井当女俗旧十五日　ゟ女禁

盆踊　燈籠　灰書納

経本流　題目踊　山ゝろ　わが庵　生身霊父母

　　たる人十五日菓の飯さゝ一銭

　　てお気をもてあたをいよ

宵あく　精霊うりハあゝ

送り火　旧十六日　伊勢山田をそへの遠き苞

　　を結ふして宮地を乙ふる

お撲　すまひ　辻すまひ　ことうひ

せいろう　盆踊　燈籠　灰書納

経本流　題目踊　山ゝろ　わが庵　生身霊父母

　　たる人十五日菓の飯さゝ一銭

　　てお気をもてあたをいよ

宵あく　精霊うりハあゝ

送り火　旧十六日　伊勢山田をそへの遠き苞

　　を結ふして宮地を乙ふる

お撲　すまひ　辻すまひ　ことうひ

ゟる事ハ人ゟあり　孫をふ事ゟのゟろれあれバさゝ

くと乙ふべーと例の堤のゟる事を或ハ法ゟやうのもの

立せう師の曰かゟるゟよ八季ゟ立のうのあーふひあれバさゞ

乙ゟふ一句あるべしとゝ眼を閉てお句のあくうを考ふ

れバゟもすがるく三日下句あれバ再案ーて

　　裏をとゟりふ麦のあうふ」と付くう

師の曰せめく季立のありふ迄うを捜さゞーて足ゟふ

ひあるうるを思ふべーとゝ狂季のあうふひあふまーを

　　捨ふ是をようそ立ますべしとゝ

　　勢たちのぼるこゝろをまて

　　おとゟーうつくて児のおぢむくま

　　付ハ児ゟぢむりまあーふひあり

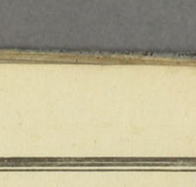
　　虜くをさゝる　秋うせ

　　弥じい鑓ありしゟ唐衣　蓼

附八月ばかりもこぶあり
宮川おすくるやうある月のうち
指書よりもきりくと 利刀
附八一時刻之指つまはあしよひと
下葉の裏の粒あり八れあり
刺指ハせりて庵花の九十九髪
附八老めと庵花ハあートひあり
指庵のてあ有もあくぬ花の日
うあひより乳母うあくさ乳を縁まて
附八乳母あうくまりハあしふひと

○月花のすす

○月花の産八一花の位仮あり八くぬる程をあてあくこの供ある白あうとも花て一花をとのべと廿五ケ条あり八れども花の白ふまりて五月の花のとあしふひて八位如白あり是又附白ふ季を指おりめく月花を白の用ふありて働くべし此とき或人の白ふ



秋の蚤 蚤 蚊 蝿 蜘蛛 蚋 蚤 蚋 蜘蛛 蝿 蚊

蚤 虱 蚋 蜘蛛 蝿 蚊

蓑虫鳴 父こひ 蟋蟀の虫鳴 蚯蚓鳴

秋の螻 松虫 鈴虫 轡虫

蟋蟀 蛬 蜻蛉 蝗

あり
濛〳〵ふるをバ春雨ともいふ
春もとハ花の咲るも頃の 月
初附付れバ一白の廻白八種乱れて月と花とハ白他の用あり赤みのせ八くさるふ蚊の虫しよひ金精振うる
狂句も一年も来て名月
御歌ふあれても花の都あと
附八旧都あり花八白他の用あり花のふまてかる傍若多人のお白を出せるを乙児う兵衛とあく附ともして席上皆舌を巻り
医者ゲ走〳〵て男ふ食ぬあり
菅笠ふ花の都と書てあり
是も花のの雅劇之附八お白の処人を都人と見出して花の一字八用之白他之庵陣の巴鞭う席上の人ふ疾をこぼさせ一附白之

檜八一日の業
蒜八一時の業
菖の実 蕗
蘭 あふぎ 芭蕉 早稲 もんぢやけ
本あふの萩 萩八一年おうれあざえようをさく
本あるどふ作る本あり本ふよりつまり萩をせしてそさくことまゞふあるゆへふあふといふふ葉びるふあふハあるそぎまれ実ふ梅聖の萩ふまれもの
あゞふおせしさるをいふ実八梅聖とする八悪
檜花 もくせい
笠萩 るふをぎともいふ一うぶふる草づあるものをはてめどきふする

檜 本八 小車の巻 旋毛 あり
稲の実
茗荷の実

・抗もふくろう鷽 雪ふる
淳和をまなびの殿月の 淀
淳和八雲のあーふひして 延白八舟遊遊あり月と雲
と八句似あり
　和臼の唄歩あゞふ 我 鼾
　月をほしくるほゝ夏の 面
附八山伏の仮枕あーて月八句似あり
　かんあんあゝぬ七夕の 恋
　名月の宿お会もくさき 芋 畠
お句七夕の恋とあれバ生会の句えろて附八芋畠ア
ーて月八句似あり
お句　　寝覚の百合ふ涙ひつ
　狼の雷ーて鳴る夜の 月
附八雷人 月八あーふひあり

解夏艸　やいと　みつ引草
苔菊の花　蒭食の花　革庵　菊の花　のむみ草
五味子　女郎花　額掴　男へし　　ふよ草
廿四孝　お撰草　益母草　糸瘡の草
廿五日　狗尾草　大よくさ　石楠草　仙翁草
垣豆　飽まめ
紀香艸　亂尾艸　栗の花　のむみ草
廿四孝　おときり草　雪の下草　燕尾草
縁仇いと　葡萄　紫蔦　楓

まふくと鳴ける石の上
　陌で乞食ふ成やすき 月
附八乞食 月八あーふひあり
　日八赤う知る二月一日
　初雪ふ伊勢の蛇のとれ初て
付八伊勢の海あーてざ八あーふひあり
お句　　曲突焚付る書の尻うる
　雪のあと月の境もそれあゝ
附八指首あり月雪八羽製結きーてさそくふくすぐと
吟ふん又月雪の句八お句の仰雪ふ功者ふ功者あり
功者の人お句人まふる時八花ふをあーふひを出て附句
ふ骨をふ廿ふ二ツ本来祝初雪の芸お秋の三句め
あるをこ亀の雑ふをまるふ男藤と菊の附ふれふ
さればこ藤八妻乞秋もあふべふ長あふふの藤はし

冷凩　柿　蜀黍　二百十日　稲妻
蕎麦　蓮飯　焼栗　秋風　初嵐　秋涼
　　秋暑　今朝の雁　初秋　ひやゝ

九月
清秋　南呂律　白露節　秋分　仲秋
桂秋　桂月　壮月　四隣　仲商
朕月　紅葉月　竹春　燕来月

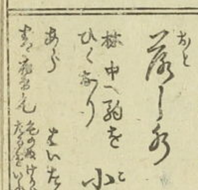
て一句まうしてハ雑あうようて秋季ホ云を付るむつかしきもあるすふ〳〵とそこび待り処名人のそろつひ法を仰ぎおもふべし〳〵

○新撰五百題発句

初鮭の跡もうましをふ多北　石叟
まろ　初鮭や咲も咲ぬあこのふ　松雄
鮭　初鮭やまこの湖る量ひとろ　二葉
あ　あるおや商てもろふ野ごの塵　梅宮
多　あるをを引重るや鮭の由　乙良
鮭　絶だ来て今日あるの笑ホ　山好
且　ふ代の妻見えケり宿の古柱　米鮭
元　初をやこととろふくる雨の竹　釜窓
　杜若やかくぬをを君ろ妻　梅斧
　えタふあり処ほの四ころう　琴堂

十五日　屠来月　秋風月　月見月　田実祝
大和　生国魂祭　九日　大坂　田面祝　田実祝　団子　旧十一日
　来客の六位以上を迎て菜酱をたまひしあり　白髭元祓　旧五日　近江　石土祭
十五日　堺天神祭　旧三日四日　和泉　八幡祭　今男山祭と改む八月十五日
　右門鼓会ハ去る文政十一子年より始まる　筑前　宮崎　放生会　旧十五日
　十六日　山崎石清水　伊勢　伊川ハ一名参ハ一名　松坂祭ハ十三日
　いけるを放つ　死活杖の祭　西京狂言の事　摂津　住吉社あり　是ハ昔刑
　此の日刑獄判法を定め氏あつて五刑を行ふなり死罪の者を退若ふまろぶあり　釈奠　本巻秋ふあり八月下うの日　神宮神嘗　旧十七日　非宮のあふまつて天皇大祓ホ祓ふ祭ハ一名御祓を献ハ五日非宮へ

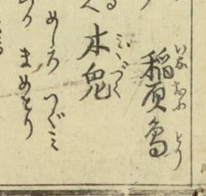
日　元日ハ四すましたるうたゝ水　一笑
元日のみうきそろ　夕べ北　奇三
　是ハ昨の八ホ代のいろやけさの妻　梅齢
　是るものゝ松ハもありけさの妻　市助
　うろハーき我の助ふやけさの麹　和風
　是ハ春と耳うふ生ゝ初うふ北　楚石
初　いさをよさ多のそろやけさの妻　多湖
ふ　ひと多をすまして中やや初うふ北　山好
北　日ホ向ふ生ハしめあり四方拝　三き雄
四方拝　海への寸鯛見渡ろて四方拝　看月
　是ろの八人も云ホよまり庭　蔦古
　是をやと四ろうとも月庭　完路
　作さる風風掃やもろうたゝ　紫青
　人あうハうとまれ徳をさろうあひ　為岬



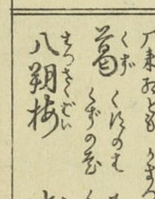
廿六日　勅使を
紀伊　つかる　冬岡祭　十八日　秀吉公　翳鳥祭　十九日
　白峯祭　廿一日　崇徳帝　井伊谷祭　廿二日　をゝ
　西京　常良親王
　秋季皇霊祭　廿三日　同神殿祭　日日前祭
　西院祭　旧三十日　山ろ　名月　旧十五夜　名月
　暴風　初汐　八月の大汐　秋の汐
　夜の彼岸　弱曳　秋の初ぜ
　秋中二弱を　小春　小たろ猪　ろたろ
　ひくあり　ふたろ　ろたろ　小隼　ろたろ
　あふ　まねきをしろたろ　鶫　鴫
　川ろーざ

門松や冠られほどの岡の雪　沢々
ありあれさた除しや門ふさう　蕎仙
居蘇あめる者やこくろ二の山　漫く
居蘇のまやたれてさし鶴のそ　友史
指す自居蘇も終　白ひけり　梅宝
此等のたもはーき靴妻う初　糠人
ありくあるくて向ふ靴妻　式　樓梅
靴妻笈おふあるし櫛並び　月庵
初　多もとるも先たのもしや元とよさ　杜童
よい　波うきよりひらきおるや百暦　由芸
三くくう八眼うも今ぶはもうとよさ　逸流
福まま一まんつのさうう礼　舟左
福寿艸　おのろふ海山のまや福寿草　冝麦
草のるホ牧明おけり福寿艸　鶴阿

麻　ひこさ　むくる　ねんどや　川せミ　ひロ　あろとろ　小多阪　多もとる
　うせき　すぐる　ーろあえ　ーろのつまを　めーろ　あろ　もの鉢　濁舘
　あ　ーろぐう　さをーろ　もころる　みきる
　あめのくろを結　おさ升　小瀦引　くーひき　いしろ易浅
　鋭　ひこつくろ　鏑　とろのうを　を刀魚　ゆ魚
　鏑　すぐ　ゆ多狗　くろれ築　あゆやな
　川鏑　うすき



腐　うろびね　来ろア　天まア　ろろう　初ア　稲夏畜
　ア の使　ア のみ　ア あ　ろろる　ア
　せきれいを云　そくくさ　賜　木兎
　産たき　産あめり　もすのまやみ
　多畜　いろとう　山ぶろ　ふぶろ　比すうふ　あ本うふ　めーろ　つぐミ
　ひまとう　てふつき　まーと　はあろ　まめをう
　ふくさぐひ　ーやく　ろう　きくいさき　小多阪　多もとる
　ひこさ　ひろふ　ひロ　あろとう
　むく多　れんどや　川せミ
　しろ　すぐる　ーろあえ　ーろのつまを　めーろ　あろ　もの鉢
　あ　ーろぐう　さをーろ　もころる　みきる



八束穂　多年の　いねあり
多　ろろす　すきろほ　多すくき
こあき　尻きくやう　あ菱
丁来おとる　うまろろの云とも
菌　くぶ　くぶのそ　多ろろう　くぶの根掘
八朔梅　ろくぐつ　本摩　柱の云
漆の云　うし　たぐ　大たぐの云
蓼の云　たぐ

かぐろ　唱　ろく　八尼をうぐつと　燕くる　つばめ
川せの　ひーん　川せの　ひっき　の　ひっ
紅雀　又鍋とも　ゆまろう　稲　ねこみる　稲の多ふあミ　中稲
いねくく　多種　いねくく　多種　晩稲　稲の多　とミくさ　多くさ
いねみ　いねろ　いねほた
撿又　田の毛又　栗山子　鶏頭花
稲刈　田刈　画伸

福引　福引や年ふまん　福引や年ふまん　福引や年ふまん
年礼　日ふよりてトテ多ろ多る礼志　年礼を受まおーねもりうな
　人より足の世話ーを吹うな
妻のを　妻のを流云笛ふうけれず
　妻のを崇ふうふけーを
海苔　屋ふ」のかーを吸やまる　の
　を多ふ吸て解るや海苔の舌落う
　聖ろもさそふ　生ふや海苔の味
　まきれあまき多と八蔵ぬ海苔の味
　多まねきをーて後」け機羽
羽子板　羽子板やまき姉もあきろうあもて

宝引を笑あく人も交りけり　烏多

羽子実て飛るも浮寝し池のもと　烏舟
立返て見れとあらぬ風の音　可考
渡り切て手おのあきやいつのぼり　優丸
切て落るゝふあるやいつのぼり　暁台
家ろふ八喰積あや渡り来る　岳浪
喰つるや香の新きたらし先　大梅
喰つるを人の来ぬ日もへぬしけり　西ろ
砂山八棒て飛て見ろふ浮ふ来　謝堂
出る月ぬ移りし山の見ろひ(おと)ろ歩　岱年
笑ふてもいろしき名也甲山　貝芸
畑を八兵ぬ人あし　椿の花　月居
二階出て月のあまりる椿かる　一鶴
数ふ椿や笹の根をわ水ゆり　雪店
菊も人のうふやむ虫のむき　書遊

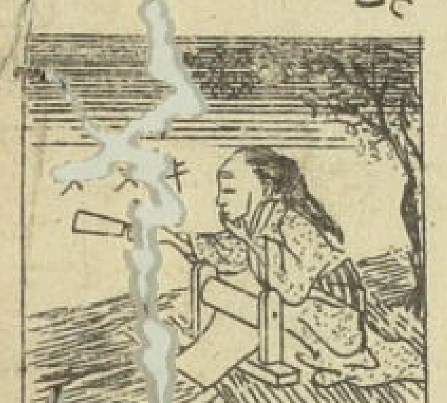
鶉草(うづらくさ)　三七の花　白粉の花(おしろい)　棗(なつめ)
烏頭(とりかぶと)　甲ぎく とも　木賊草(もくよくさ)　鳳仙花(ほうせんか)　梨(なし)
金剛草(こんがうさう)　芦の花(あし)　とろゝの花
紫苑(しおん)　鬼のしこ草(おに くさ)　青花(あを)　露草とも
野菊(のぎく)　薊の花(あざみ)　山薊の花(やまあざみ)
百部(ひやくぶ)かづら　茴香の実(うゐきやう)
曼陀羅華(まんだらげ)
蕎麦の花(そば)　うりやなぎ
芋(いも)　いもがしら　こいも　おいも　いもがしら　親いも　ずいき　芋の茎　芋畑　薯蕷蔓(おにしよほうり)
ぬかご　つくねいも　琉球薯(りうきういも)　甘芋　さつまいも　烏瓜(からすうり)　赤ふくさ

初音してうひゆなりぬ臼の下　几董
夕暮やうぐひす庭に来るやうな　柳壷
鳴声がふ蛙とふあり葉の面　三子堯
緑の音も流むる水や蛙　嵐喙
月見れば水静なりあくかな　蓼太
鳴や田の蛙の声八勝しき田ふ式　士朗
鳴とくふさ雲のさゝき田のゝ　鳳郎
里八路田の手ぬ高ふ戸口の来　卓池
おもしろい雲の見るる夕ひばり　成美
実のさを出る中空に鳴雲雀　蒼虬
春毎に眼八廻なり揚ひばり　墨書
菜の花や近って遠い垣とあり　抱儀
菜の花や田へ入込てひとさけ　卓池
菜の花の世界に今ふも入日かな　浩く

十月

宇治の茶の花(うぢ)　草花○西花ふ及ぶ　鬼灯(ほゝづき)
茗荷(めうたむ)　たむとの花　たむとのくさ　芙蓉(ふよう)　木ふよう　草ふよう　大豆引(まめひき)
牛蒡引(ごぼう)　稗刈(ひえかり)　粟刈(あはかり)
稲刈(きび)
種瓢(たねふくべ)　冬瓜(とうがん)　新米(しんまい)

木賊刈(とくさかり)　菜種まき(なたね)　かぶら蒔(まく)　大根まき
ことしまい
薬掘り(くすりほり)　砧(きぬた)して　衣打(きぬた)　梅擬(うめもどき)
牡丹の根分(ぼたん ね)　芍薬の根分　焼印(やきじめ)　燵印(かまじめ)
無射律(むえき)　寒露(かんろ)　霜降(しもふり)中

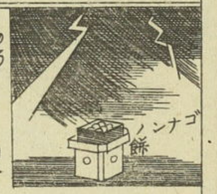


雑子の拡くう抜たる 雑子う亦 書翠
ま 耳たてく行きく雑子そ啼さ沫 琴堂
彷 山も野もみどりふ帯て啼きくん 朽菴
彳 屋のあ谷屋八ツとも気のつく 黄山
彼 大くさみありてきらしねるう 倣年
岸 きりくと羽音あしてくる丁 稚白
の 鳴虫一の足えろき彼岸くる 為山
月 おもものつくろひ急速彼岸う亦 護柏
秋 細ほそ演まろまる彼岸式 渓春
月 妻の月さびや住来の袖たもと 為山
逢ふほおもひもありて笑の月 楚石
妻きくん泊りくんえて妻の月 旭山
ちりきくんえありぬれをおぼろ月 純仏
雨輝るけむりふ着て秋月 葵白

季秋 盛秋 雪秋 深秋 晩秋 暮秋
五旬 素秋 紅葉 季商 末秋 深秋
残秋 玄月 菓月 旬月 杢月
紅葉月 小田刈月 木落月 寒気月
不堪田の奏 旧七日 是八諸国田の被害のわざを 赤間祭 七日七門 安徳帝
目録して租税を免ーめくーん
泉涌寺舎利会 旧八日 山ーろ 椎宮お撲 旧八日
酸漿祭 同 四宮祭 同 大津 水天宮祭 同 山崎 伏見
重陽宴 旧九日 重九 菓酒 栗旦 九日小袖 菓を衣 衣菓衣

苗代 蒔 出代 実際 出代

苗代や鍬を杖なる親のまう 民賀
苗代の親のうるさき 植う亦 大略
植薬や薬板うる祝儀き 始る
蒔うた 袖おもう合壁を 式 省庵
播相の畑も蒔のひろう亦 為山
嫁の墓やさんく亦さん亦の播ひ 虚白
菓のまちの親子見ふる出入式 護柏
誉て怖く贈る実在お式 経友
出代りやゆろふ(ぶ)名もまとひり ぬし
出代や約束うるきくの 苗蓬
出代のま越たお名こう 条 末広
嫁あちりまるあくぬるく妻の 雲井



もこもの 後の雛 那谷の 子供衣き袴る
くふけ
麦飯祭 旧九日 今六月一日 下多明祭 旧十日
山ーろ 山ーろ
多川祭 旧十一日 例幣 同 栗田口祭 同
山ーろ 山ーろ
后の月 旧十三夜 十三夜 俚諺の市 同 弁の市 宝の市とも
月の名称 すまふ
日蓮忌 旧十二日 天王寺一條舎 旧十四日 石上祭 十五日
大坂 大和
岩倉祭 旧十五日 一宮祭 同 河内 小倉祭 同
山ーろわ山
弥四郎神祭 同 東条 宮崎祭 旧十六日 山ーろ東山
慶舎利会祭 旧十六日内宮 例幣使勅使を 立うるーあり
十七日外宮

の色　季ろもみぬれさら芥子の蒼哉　岩翠
季別て梅もきさを色の浪歌哉　嵐吹
季の日のさし込きの大おけ哉　大梅
在芝ハえんえて伸し季日哉　卓池
季の日やあをむきあるく芥の花　夢古
季ぐさや返すのろさ凸しある　梅叟
季ぐさや大梅を昇る朝日うけ　二旭
岩角もる水や季ぐさのちりねぎ　春蓋丸
須久る日ハ乙鳥もかくれけり　完来
乙鳥やいとまあきおをそおほよ　岩翠
ちりくおあつて花ろう乙鳥うち分　卓池
下萌やたび物とあき沽て　花儀
下もえやところくお暗のあとん　夢女
下萌ふあろうあきろの白ひろふ　由芝

伊勢路遷宮　旧十六日　十七日廿一年目仮社立遷　例祭十日勅使六日の夜　呉服祭　十七日あやめ　十八日くれも　おはぐろ地回向あるあり　渡利祭　両東る辻　駿河祭　ひろ　桂川の出産　大蚕祭　牛祭　旧十五日　牡丹祭　廿三日　八幡祭　旧廿日　仲哀天　鹿谷祭　旧廿四日　山ひろ　逆髪祭　日近に　木幡祭　旧廿四日　山ひろ　天満宮流る　日　山ひろ　小山祭　旧廿六日　山ひろ　津村祭　旧廿七日　大坂　鳴滝祭　旧廿八日　山ひろ　花供とある　尾越の鴨　紅葉

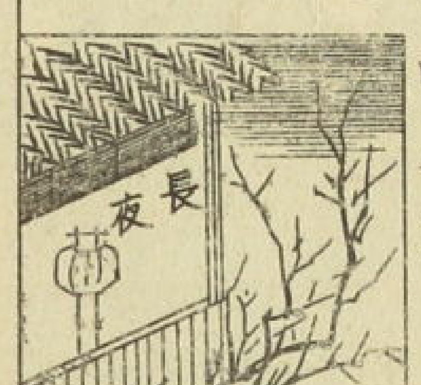
もこ多の身　もこ多の袋　色ろ多　色あるふ　色あるふ　とても秋　狼獣を祭る　名木ちる
まさ木　松ろぐふ　柘ちる　気久め杉　椎　榧　ひふ
栗　とおろう　あばくろ　さぐろ　くりめし　柳　おなし柿　とわり
木の実　柿のこ　南天のこ　椋のこ　椋つこ　櫟のこ
根香のこ　樫のこ　果李のこ　つぶ　どんぐり　ぎろ　もーばこ
せんぐんのこ　むくろじ　ほぐいど　くるこ　ひよん
枳殻　何そ鳥　密柑　金ん
九年母　柚べし　造る　柚　万年ろ
老母まん　仙蓼　芦の穂　芭蕉破

茸狩
食あれハ茸ありてかも茸のめし　貞光
菜摘
菜つゝ咲ふ洗くありて日の茸　但く
菜畑の人をおもふ菜つゝみれ　祖〃
唄ふのて菊采ある菜つゝ哉　風石
山本ふ来て哉さむさや蔦の花　蕪村
蔦の花
おろくり綾さして見る蔦の色　白雄
渋谷しきかつゝありし蔦の花　月居
山吹
山吹や一枝もさむさかなかな　護物
山吹や條りまよりてのゝち　百堍
山吹や錦白のまくふ着て行　蓼太
行春
行春や横雲ひだし山のすそ　存山
行春やもきましめての花の色　門左
旅やゝふ春や行なり桑木畑　一具
白酒
白酒やつまやうある庵の酛り　去和

白酒や菓よし裏八旅致も亦　蓼和
白酒やうし童さる嫁の酔　清月
麦うつ
やゝくと身を遊して麦うつふ　西石
風ふもれ風ふ吹日や麦うつふ　雁岩
世を思ふ花もたくひり麦うつふ　芦月
まをふひ
ま蕨や十日の酒歩り十の指　存義
まをふひや錦下て来さ絶も遠し　書府
山里やまをふひあとも垣根草　文甫
別れ
別れ来ぬ日を立てなもひけり　柳依
別れ来上野のさくらめくりけり　梅枝
花
花の山下りて見くれハ風も遠し　一具
遠の田ふ見えて来て花の蓄　卓郎
花ふ来て花を見するゝ盛り哉　護物
百
曙の花ゝあらくて百千鳥　升六

思草（おもひぐさ）　仏甲草（ぶつかんげ）　小藤花
葉牡丹（はぼたん）　葯蒻玉（こんにやくだま）　葉薑（はじやうが）　草牡丹
茘枝（れいし）
つるれいし　茄（なす）　漆名（うるしとりうるし）　うくす　ふくべ　接（つぎ）　のいろ　葡山
豌豆（ゑんどう）　ぶんどう　八重なり　茸（きのこ）　くさびら　岩一ぬし　しめぢ　枝さけ
萩のおもき　草山のおもき　桔梗の色（かれのいろ）
嵐さけ　松茸（まつたけ）　椎茸（しひたけ）　松露（しようろ）　尾花ちる
菊（きく）　おく合　更せ　ぬれさぎ　金目貫　大もんふや　弥金
酔揚妃　羊鞍　女郎　四谷　用覚　新尾さし　銀台
玉のまさ　黄金　菊きく　わきく　白きく　とよりきく　袋きく
奈良黄ふりの　まりきく　獲きく　おとめむ　弟菜　百菜
ちまり菜　百菜菜　のきせ　菊の名　きくのめ　きく
○そのきくハそうひと　ありけり　生せしまで　やせとる

きくの　そうひとハ菊遠と書きまかりくねりたる枝ふきくを俗ふ菊我とりふありとそ古俗云説あれとも とふ男石に
残る菊（のこるきく）　後日きく　十日のきくとふ　新蕎麦（しんそば）　新酒（しんしゆ）
あとのきくの宴ありふ
古酒　中くゝ　ぶさう酒　とびろく　もろ　あふれ酒　あらゑめきけ
小曝紅餅（こさらしえふね）　白あお　堺の浦ふ
あり　番船（ばんせん）　高足で　新もの　旧上方船ふ新くり酒の初荷をつみて　来る入津を争き一ばん船二ばん船とて　あたふ其年ふふ之
茶臼撓船（ちやくとふね）　旧来船の番子洛中町くふて　やさきこゝにをとしふひろつき　そふ相のちやくとしかくとじぶげんとなりやせしほし今八あし
紅葉餅（もみぢもち）
露寒（つゆさむ）　霰しぐれ　秋の霜（あきのしも）
漸寒（やゝさむ）　うそさむ　もとさむ　すさまし　朝さむ　よさむ　そゞろさむ
長夜（ながよ）　夜ながき夜
住吉の御送（すみよしのおくり）　旧廿日
暮秋（くれのあき）　あきのくれ　秋深き　秋ふるて　秋をしむ



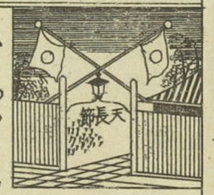
名を問ふかきりある世をあるも
もとかしき夢もまじるや百よ
冬鍋や押してきさき牛車
やとかやかしの四もも人の立
梅白きこと成り磯の冬鍋う
永き日 まの〳〵て末然八足ぐ杖ささく
冬 鍋絵屏風そそれぬ庭火
つゝ 灯ともして思ひ八巻き日えけり

金蓮 湧多 流芝 梅宮 閑夏 一具 素盃 抱優 叩瓜 夢木 濯抱 仙翁女 感吉女 虚白

梅 拭 氷 麦 涼 菓 柳 衣の月

又庭の梅や牛小舎く 蒼 五渡 海琴 以静 多乐 一情 梅柴 こゑも 春潮 一幽 笠裁 白雄 空瓜 多箕 外

塗木偶の乾く梅の日白乳
見あるもあくて日をふる梅哉
町中八日のちりくや氷うり
狗くくく世の営くや氷うり
ひやくし氷麦やの看うり
鶏一はの引れぬ塔の涼菓哉
御あの水を汲むのは菓うふ
葉柳やこちらのあもり畑
菓柳やもる灯もそゝぬ鍋の上
菓柳の古町ふる白飯うふ
衣の月をハもくれて出ふけり
陰りまの懐ひうゝ衣の月
金屋の内ふ垂くゝ衣の月



冬

羽音 陽気 立冬 南亟 守燈 三餘

顳頊 顓帝とも 玄冥 玄帝とも 上天 玄天とも 律 檀

應陸律 立冬 旧 小雪 盂冬 折木 木凋

十月

擽陽 初冬 朔冬 早冬 麦冬 上冬

秦正 虹蔵 始氷 心陰 陽月

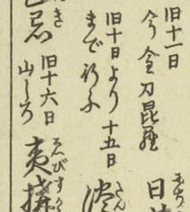
小春 良月 春陽の月 しぐれ月

初雪月 小六月 亥神月

冬

神送 一日 神の旅 神の留守 神集

天長節 三日あり光仁天皇宝亀六年九月壬寅勅に十月十三日八昌朕が生日之成日ふ尊ふ感ふ集ふ玄く内外百官ふ饗宴を賜ふと一日仍て此日を号けて五巻節とあり十月巳百天ふ尊ふ尚ふ依て宴会群臣ふ



蓮供忌 旧五日 水仙忌 七日 梅屋

奥義法華会 旧六日 火鉢 維摩忌 旧十日

金毘羅祭 旧十一日 今宮刀毘羅 日蓮忌 旧十二日

十夜念仏 旧十日より十五日 浄山忌 十七日 火鉢 滝見公

宗祇忌 旧十六日 山ゝろ 麦搗 旧廿日 餅ふの音人 家みそみある 坂玄文

蜾蠃　かなやせ　百日紅　うきつもさう　百合の花　若翠　星市　鳥明　蓼太　松濤　菜毒　居山　百明　完来　居山　万和　卓池　僊和　士治

蜾蠃かなやせと云ふ蜂の羽音蚊のごとくやゝ一ときたゝき筒のせゝり声のごとくやせの我骨さくる森光ゥ孔あけ巣を作る

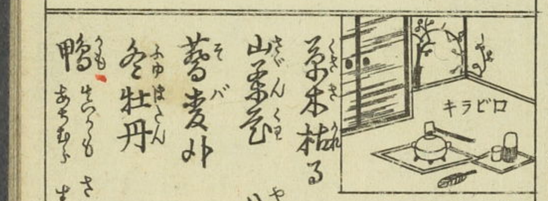
百日紅うきつもさうと云ふ木槿に似て木ばかり也

百合の花の衣を通行山路ゥ歩行人ふと一ツも交る時ゝ赤き服を着たる杜若抔散てのち俤ふたつ牡丹ゥ孔そろひて咲牡丹抔孔

牡丹

松毛

蛞蝓



一具　物案　蓼太　士治　居山　松濤　菜村　護如　白柱　凡夫　田蛩　清音　双柳　一松

夕ぐれ　雲　をむすびても　字智田の神　祢まつる　初雪　こがし　風　旧暦八月その朔日のあらそふもの　初氷　懐爐　掛火桶　巨燵切　燵つ発　周燕哀　入取立そ　激雷　の后十日めの

旧廿八日　綿の魂祭　廿三日　粥誓祭　廿三日八百万神不粥餅を供じめ之

神立風　その大風　月潭　時雨　しぐれ

雲　三の字　もろこし　雲の字　もろこし女　しも　しも敷　もも清るとしてもゝを

山茶花　八重のお　葉の色　お菜ちる　蕎麦ゆ　冬牡丹　菜とる　鴨　をつのつるまバ　蓼　水の根をあらひふくべて枝中もたくく火　蓼葉　蓼るゝ　水のそ　柳　萩　屠蘇　れ艸　麦蒔　枇杷の花

青田　黄　時雨　秋鶏

幸倚の杉に吹れんひとくもの　文中
かり若さへ身に似合けり草の　由松
古塚まで呑あの高き青田　成　卓郎
笑顔してそ年はといふ青田かれ　梅宮
大切な鶏鶏のほる青田か東　月居
飛鳥鶏の命そうけくしき　公翼
出連ふて扇にうつれほこる　成　葉更
鶏に往て跡によりくる黄　成　笛哉
時雨なもひ抱そも月夜か東　士郎
時雨くもる林にあきおろ　護物
山風に夢もしらせてほとゝぎ　卓池
飛ばれる思葉かりぬ鳴あ鶏　梅宮
黄生に知らぬたつくあ鶏　成　外六
更行ハ人者凄きあ鶏か東　葉更

手鳥（ちどり）　むらちどり　もまちどり　殘ちどり　さよちどり　ちかく鳥　なちどり　志ばなく
鶯の子鳥（うくひす）　さく唱　鉢（ぶり）　飯（あぐ）　あぐと汁　生海鼠（なまこ）
このとき　氷魚（ひを）　鉢（ぶり）　ひをの使　玄猪（げんちよ）　ゐのこのもち　旧初亥の日
菓の口切（ちやくちきり）　豌豆汁（あつとうしる）　孫子（ことばうし）　孫子（ことへ入）　孫子（ことくり）
ことつむ　蒲團（あとん）　衾（ふすま）　紙子（かみこ）　頭巾（づきん）　足袋（たび）
革（かく）もをり　ゑり巻（まき）　近江越（おとりこし）　一向宗の祖師親
らん上人の忌日　旧廿八日本願寺にて大法事あり寺を並に
出家八十月へとりこし　孫子法事に法事をつとむるをいふ
妙音講（みやうおんこう）　旧諸国座頭の名あり　十月十四日一弱くの座頭
仲間より合皮列を出し　毎乙妙音鶯の像を

牛棲　粽　凉　夕立　新茶

牛棲る日とて鶏うふくもりけり　柳多
月侍て定めん牛のうゑ　阿丸
牛棲る霜や机に絵まきもの　如木
姉しきにいくらもほとく粽かれ　士郎
酒もりやさきと粽を盆のうへ　大梅
粽ゆふ手斗り見ゆる竿　成　梅宮
凉しさや菓をさまれこるゆふ　為山
凉しさや竹ハたある海のさと　杜鵑
家やすき凉こ笑や椎下本　惟竹
夕立のけむるやうなり海のうへ　霞山
夕立や雲も落来る梵川　風郎
夕立や菓茶を抱む村すめ　茶村
雪浴肉津並へて知れぬ新茶　成　惟草
いくも番も新茶に合やあ所　義冨

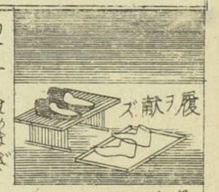
十二月

かけ種くの作物を備へ頃ぶんに平家あどをかくり通夜するあり　燋糟喰（せつさうくひ）　座の式あり

黄鐘（ひとうしやう）律　大雪（たいせつ）　冬至（とうじ）中　仲冬（ちうとう）　周正（しうせい）
霜晨（さうしん）　成冬（せいとう）　芸生（うんせい）　冬半（とうはん）　陽復（やうふく）　碁知（きうち）
星紀（せいき）　氷杜（ひうさう）　宵水（せうひよう）　子月（しげつ）　辜月（とげつ）　暢月（しやう）
復月（ふくつ）　雷月（さう）　天正月　神乐月（かぐら）　雲陰月（しもり）
雪見月（ゆきみ）　雲こもり月（しもり）
朔旦冬至（さくたんとうじ）　旧十一月一日冬至あれバ来より十年の間
此年なるよしとよこを改めしあり
一陽値蔵（いちやうかぞう）　十月亥陽の月にて冬至より一陽来
復すといふ実陽を蔵ふと云故なるあり

敗　里俚
敗毒　為人
合歓　流芝
の花　千本
仲の　扇骨
子　文常
起臥　喝山
牛蒡　里芻
蒡　扇骨
蒡　寛里
蒡の　由芸
花　抜
蒡　里芻
蒡の　抜皮

旧十五日　袴着　旧上　大御講　旧廿四　報恩講　一向宗祖師親鸞上人の忌日十一月廿八日より報恩講を修す　里神楽　禁中の外のくくりとよぶ



履を献ず　俗に廿三日より廿八日まで七日の間大佛ずあり　里神楽　禁中の外のくくりとよぶ

旧十三日　弥四郎　つみねをたくさんあどるあり　髪垂

旧十日　煤払　たく火をいふあり　早寝　神楽ひと

旧一日　芝居初日　空也忌　旧上　俗髪あて出家をいふ

旧廿五日　袴着　旧上　大御講　旧廿四　報恩講　一向宗祖師親鸞上人の忌日十一月廿八日より報恩講を修す　里神楽　禁中の外のくくりとよぶ

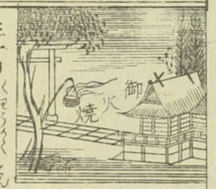
旧廿三日より廿八日まで七日の間大佛ずあり　里神楽　禁中の外のくくりとよぶ

旧十三日　弥四郎　つみねをたくさんあどるあり　髪垂

旧十日　煤払　たく火をいふあり　早寝　神楽ひと

旧一日　芝居初日　空也忌　旧上　俗髪あて出家をいふ

蒡　英里
蒡　蓼蛾
鬱　其棚
仲　裏生
仲間　麻衣
逸　晋足衣
扇　越
士　朗
肩　月
長　栗
農　支
案　碑
曲　川



旧三十日　山神祭　旧　中山祭　旧　杜尾祭　旧　大系聖祭　旧中の子の日　南宮祭　旧上の卯日　宗像祭　旧中の申日　光格天皇祭　十二日　牡丹津島牧畑焼　旧十日　宮参祭　旧上の申の日　菖蒲祭　旧上の申の日　東三條神楽　旧下の卯の日　南麻祭　旧　春日祭　旧上の巳日　梅宮祭　旧三十日

ちゞや　さゝあこ月の祝　あけまき　大次　まりくす　うちろき　ゆくりとよぶ法ふあいご　はくりとよぶ人皆まろうど　十月八日　弥宝月次祭　四日　伊勢　幣帛発遣　旧　浪撥置　天皇祭　六日　大抜　吸炭焼　俗ホ　宮像祭　旧

田掻　我田の水へ掻集る為田うねたるの田掻の事

掻手の引からげ　こゝろれう事

掻ならべ　近在やまの田の井代いく迴う

多の秋　敷ねのくきめたる景色田我

物価　敷ねうの明るう落るや秋の秋

きの菓子　雲や沸き駆あるくや秋の空

蓮実の売や物価よう実の景

咲の物価よう実のけむりう事

夜産宝　月に雲よう雲うして漂ーたる雨ーう

眼のやう月の流るやたゝむろ

月の産へさー辺月やなさーき

渚のやう我拾ふーうる夜さーき

士朗　魚妙　菊三　静多　東園　扇秋　素元　妻生　伯支　士朗　宿く　掬堆　春民　一嚢

日吉祭　旧　松本祭　旧中　年　幸川祭　旧上

日吉隊時　旧中酉　賀茂降雨祭　旧下の酉日　三嶋西市

旧中の石日　伊豆　雷鐸神事　旧中丑　以上十八ヶ所のあれ数夜あり勾ふうて春をむやぶべーし

雪　ちの雪　雪の雪　雪ろぶて　雪仏　雪たるまゆ　雪くるま

みのもり　雪こし　雪先め　雪女　雪うき　雪車

上をふくるまえ

雪ーま紀　つもりたる雪を風の吹立雪ぞ

目ふ吹迷雪　こゝ谷雪あぐとうそ八人死ぬ

あぐきたをれ　吹雪　雪を風の吹立雪ぞ　雪笹　小ふあて雪の床

とりふとぞ

さをる掬　雪をくつもいふ　雪ふるのまゝう

ものゝえ　雪の上つゝきもの　糞　雪ふるあり

霰　氷柱　根竹　凍　氷

日傘　扇秋

団扇　義写

夕涼　扇秋

めくら子　扇雨

蓮　扇雨

団扇ふさ　もみらる日傘ろ

日傘古代　紙のまわり紀多日ぬ

団扇　雪ふ紙のまわり紀多日ぬ

ふとまきり　結雪ふ紙の蝙ふ武

夕白いやつる男ふまる　煤

夕色ーふ栗酒の煙うをうたり

よーきりや物産ふさ　雪ろうに

去ふうふ今ふ云ふ比ふくー子

蓮服の飛ふふよ春海り

敷りにの付てふーや去の花

仕商ふ去ふ団のたちり団ふ仮

唄ふふくーまふふふふり団ふ仮

仮ー飛てふふ団ふんふ仮

ふる去る団ふ日ふ春ふてとふり虫

ひもうミ　雪苔多　羽くひ多ふ沸多の毛を拾ひ

食ふて雪中ふ八多の羽足ふ飢て

己が羽を咬つし裸多ふ

るふへきを若ーもあり　鶯　うーと鳴

大たう　足たう　歩たう　もたう

ふたう　たう逃　羽あしの鶯　雄う啼の鶯を

羽をあふ抜あそ鳴る

屋形尾　たうの尾のまたふ　憂古毛　たうのさをとそ尾鶯

ふるをいふあり　のとまりをあり　鶯の妹婿

たうの女たうを　退羽打　たうを落るとき　力業　たうの毛をたて鳥

もふふあり　あんとふるをいふ　もふふーとふの根本

の根を片足ふて　多栄　それとるたう　多栄

つゝふるをいふ　とりふ　ぬくめ多　多栄

とりふ去のくれあ　ぬす立多　たう啼ふ抜ふふ多を

ふのりふて八とりむといふ

鶯もすがふ立をぬくめ羽ふてうのふ多を

もふーふとりのふふりふへ八修多ゆふ立といふ

一夜酒　菊ハ風あき酒ありや一夜酒
いき酒ん菅の仮寝の初と歌酒
冷麦　冷麦やさかりぶ風のあるし風味
冷し汁　岡井戸の名残自慢や冷し麦
冷し汁　冷し汁紙屋あるたきけり
菊　篠載しよ月ゆる白粉や冷し汁
軍さもの面や秋の雨車
新蕎麦　新蕎麦や人の寝覚秋の月のほと
川魚　魚支度してためろうや川の面
川魚　川魚や浮世まちする雑魚小海老
冬天　冬天や鳥のごと雲間の静ら
冬天　冬天や風見のかぶと風残まり
我鶏を　我鶏を踏ん源しき広板うの
何れあく　何れあく寒の寝ぎや広板川

拂枝　風秋　夷生　拂友　雛九　山林　扇秋
夷釣　吉誠　西号　寿宮　九吉変　文路

二のもりとあ[illegible]
さくづとよ[illegible]

倫立とおて[illegible]
のうげをかくれとぶをいよ[illegible]
の山のう百[illegible]
しめてきじをとよせぬよ依て[illegible]
杜又魚　あふれある日　牡蠣　鍊　くじふく　くじふ
あふれある　もりつく　一つもり

櫨の花　水仙　金盞銀盞　大山蜜　椿の花　冬至梅
葛引　薑引　胡蘿蔔引　大根引　ふろふき
紅葉　葱　野生姜　雪の下
冬菜　葱　菓喰　朧
雪やけ　鞍　鯛味噌　玉子酒

芒乗うり　朝市や寄ふ恵秋持芒乗凡　義重
月鮎　鮎り来し注しにむくや芒乗凡　旭家
文月　早起や初ハ寄ふやきく八寄し　可雄
文月　翌旨あれとものよ人よ一夜鮎　定雅
文月　文月や女子交りの内料理　庄甫
文月　父月や子に掃かけし翌のし　其異
立秋　おしやりよ秋立秋の煙りつ家　一魂
立秋　初秋やけむりつ雲ぬ切乃口　小明
立秋　イて秋立乃響の走りこの家　鯉友
残暑　掃出しこ家よ残る残暑哉　多采
残暑　秋暑し人ハ動よ我ハ又　宣範庵
稲つま　稲つまや往気よ家れハ仏の入　三車
稲つま　稲つまよ人呼て通り者り　及祿
秋　漢りぞよまの見へ初て秋の風　拂笠

行ハれ[illegible]
といふハ俗せう[illegible]
煤はき　すすはらひ　すすはらひ件
管　[illegible]　[illegible]　[illegible]
一月の鍋物　いろいろもうり買ふると　衣配　[illegible]

豆腐氷る　湯豆腐　鍋煮汁
水洟　鍋つき　もちもちろ　もちもちろ
旧十二月八日　八日　着沽の設　河豚　旧十二月昔ハ
上方八十三日　諸家ハ仏名
年忘　年の市
門まつ　古暦
寒季候

風ふく　秋のうせ　遠く
夕つゆふくや　右猫
雲　実のらぬそ粉ふるしけきの雲　晴麦
雲あつも夜頃の下けき　乾牧
雲おし晴りて川よさ浪日ぐ　見外
夕雲雀や今と雲の猫声り　其因
雲むれや幾田残高一丸の果　早帥
雲ゆく九雲ん流れれ雁や落一ゆ　扇秋
秋の　昨る夜のそとるー枝の雲　扇秋
空　松の児のみ外ぐう秋の空　去誠
雲ゆまと江尾海りや初月夜　久々女
雲ろ　眉そくもろーけ　扇秋
自取　月影や坂と坂の今きぬる
結　おや先い灯のうとき当高ぐ
七　七夕や風の智うて雲の降る

旧下の年の日天よのおじけづりの屑を　大年魂祭　大年の夜先祖の魂まつりするあり
今七月たまつりする　年籠　年の暮　掛とり
大三十日　除夜　戈競市　衆況
油まめの市　年木樵　葉薗市
呉服の昨飯　御元食

すると　冨足　旧大三十日の夜こゑをさるさまよ呼てるき
よ　あふの唐り北方の星気をみて来年の吉
凶をこふ　三十日　旧大三そうの前日
あふをよ　三十日　をこつごもりとよ　仏名　旧十九日
一日まで　ろげ豚　天子より仏名のをまひ　ありじあげ
おめくるとよ　ありじあげ

七夕や奇ふうあき俵人物　芝好
盆　うあきやのまあ夜泡盆三日　渡初
盆の雲月よ気ハあのうり　蘇文
鈴涼　雲を蚊の喰ーるるる鈴涼ぶ　鰹友
信のたのおりる月や浪浮ー　里雪
初　魁ふいそろ浪くー初あふし　妻湖
あり　雲扇面よ次辺祖やも門風
花　雲の鈴涼くや花鉢を売れ多
雲　眼体のよおれ見てるる花咲ぶ　管所
末城　鈴縁のけうき当やお城うり　妻乾
芥汀や末城の風神夜毎哨　如鶏
旅別　雲月を知ふてお経の峯旅別　英掘
帯　汀例い能の月夜と峯旅別　里雪
牛の　笔なの人戻りたり帰の妻　守好

芭蕉翁口決

○若菜つミハ気ろく菜葉指ハ俗ー令法指ハ俗ー
白梅ハ多くきし紅梅ハ遅く暖あり梅ハ暖也して然し
く梨子の雪ハ降ー海棠ハ眠れるようきろ雪ハ降てるるう
たち柳ハ四ふ見ろるよし四ハ柳ふえてるハあし
く雪ハ雪く降る　ハ梅ハ服あの情初さろふハ林檎よ
りふー初の雪ハ深山より里へ知ふハ屋降く歌ハ
然ー雉ハ屋ハおしく歌ハ鴨ー卯の雪ハ残の垣
根赤谷窮のたーき牡丹ハ雪の頭め菜の雪ハ夕
日のあり見ふ菜の雪ハ四会めく菜つミハ風家あるもの

夷　花も実色あくてさやうそ帋の夷　永止
角力　夜相撲の出れをふせく烟のあ　東國
丸　象の名を出る名所見あり角力花　曉甫
花火　渡し待間や二三ぶ花をつ花ゆう　文女
物きる母の後へしき花やう　大鵬
朝皇　朝皇や金文智て小半日　玉脂
朝皇の雲も渡蒼の日こゝ武　秋竹
萩　笠まく日も伏きぬ萩の花　清武
萩へちるものと見る追さうり　舎用
七草のふもれてふくるく桔梗　象嶺
桔梗　象に実の入てたつらり桔梗咲　風若
象やと泥象の志ぐりや夜たる風　冷山
夜たる風　花よりも匂ひの深し夜たるま　桃人
葛の　いつ咲て萩も見たるに葛の花　乙良

葛の葉ハ晴て葛后の詠めよりしかハ夕に当り面ふく更て当
ハ沸しきを催し葛ハ妻子清れば枝にかゝる紀子ハ妻
子つれる枝にかゝる時ふるかも情雅にしたるかも当心ある
朝まく鳴鳥の類雉子雲雀の朝夜眠らざる鳥の類梟
夜鷹木兎ほとゝきほとゝぎの鳥の朝深しき情のもの
海たる松原拭掃露の怪異の情のもの蛇上の鷹ハ
染鯱ちり兎んの朝麻乱髪鳴戸室の情のもの白蛋　秋
塗立曲突のぬり立重屏墻鯛の歯ぐき酒の酔さめ
○夷の月ハ薄きを求れ夜の月ハ東にておもしろし秋の
月ハ限りなく求るの情冬の月ハ東にて西凄し夷風ハ

草の花　花つむ兎とはあり女葛の花　隆年
満ちてもしくも草の花咲ぬ　素周
草花や名もさ曲くとうろ草を　梅支
蘭屋蘭のや内ふもあれとあり物　市僊
蘭屋蘭のや夜蘭を倭山打夏　扇舟
まんしゅさけ　ところの日のいつつきや夏珠沙花　一具
夏珠沙花蘭結ふ蘭も祭りなり　春水
女郎花　動く夜伸るさ曲あり女郎花　四端
咲ちる被のきそやおさかへし　一清
稲の花　朝月ハ桔梗へ退て稲のたゝか　九起
稲の花山田も匂ふ日和このあ　夷朝
かなし田ふ出来ぬ七夕稲莚　守好
雀追ふ子も一緒や稲むしろ　大梅
花を退けたまし浮つく笠葉かな　舎用

下より上へ吹上る夜の風ハ斜に吹冬の風ハ地を吹夷
の風ハつれく眠たきもの夕立ハ強く志ハらくの時に晴る
うるち五月風ハ降つくくきたなし秋の風ハ沸しくあハれ
あるもの狗しくれハ待てろぬれて見るき情もあり時風
ハいよく沸しさを婚あハれをさそふ冬の風ハ何とおく
故々をおもふ情又時あらば暖の情○木の花ハ且に咲く
草の花ハ夕に咲夷夏の花ハ燭枝よりまく咲秋冬の花
ハ梢よりまく○町中の雪見ハ朝を催ひ初雪ハしぐ
れハ待かず情雪数ハまゝ待朝の雲ハ板橋の気色よし
霰ハ板屋板ひさしにきくり又ハ葛の待るあに当らよし

芭蕉　世の残捨らんて植るや芭蕉の分　芙蓉
木槿　往来のおもき多や白木槿　素文
桐一葉　わけ出て木槿の奥の祭りけり　梅窓
こぼしと落る一葉や門庭　行所
風の素て落すてんかし桐一葉　文女
蜻蛉　首さへて眼たかりなきる蜻蛉哉　虚白
どん外や何残思案の蛉の先　禾木
蟷螂　蟷螂の身の手足や逃様ひ　等哉
鋸の及ぞあれや蟷螂みなり　了古
きりぎりす　夜あられて鈴の伸るきりぎりす　為山
壁くおる浅我きりぎりす　圃女
虫　世あくやもの月たへて虫の海　只考
鳴く流る虫まで城小濱の夢　菜渡
蓑虫　蓑虫の秋うけ八鳴　や〜な　美湖

虫　簑虫字流残の名く日和哉　吉琳
いとど　細うありたる灯や鳴いとど　稲彦
小舟一の有者汲んで啼いとど　其路
蜂　こころきや物さけまの袖に入る　暁暉
蜂や盛残わたれさは濃の灯　斗蓮
みの虫　る士我の噴洗かけまし蜜むし　扇所
見の水素ろ秋ふ放しなり蜜虫　風所
稲　清泉の先追稲の穂なゝお車　東園
掛稲　掛稲の干揚る者や秋のこの世　牡河
通る丈阿て稲干出所この上　溪外
稲川　稲葉て静かにたるの里の丸　山笑
花の時おもひ見しと梅擬　旭所
梅擬　畑へりと流るゝ分や梅もどき　佳柴
鈴　鈴虫の啼き声れなかりけり　小周

○花侍て遠近し　草ありへて風近し　海の音ハ豊饒なしく秋静なり　川の音ハ豊静なり　秋饒らしく霧ハあさ深く夕落く　雨ハ面白きものなり　菜ハ淋しきもの　餅ハ人よき物ところ汁ハあぢしき情　紙子ハ老たる人の夜気するく　紙ふすまハ侘しく　淋しき情　草の花紫ハ実あるべし　木の葉ハ支句に諸まる葉ハ難かるべし　支に結んで苦しかぶれは藜木の葉ハ支たるべし　殊に六月のところは草の萌ハ黄なるもの　○沸ぶと名かりハ禁裏に限る　余ハ里の字付べし　此所と名かりハ浮世みうきる　余ハ御家に及バれ　○其来るハ音なし　秋来るハ音あり　陽炎ハ消す

明らく　稲妻ハ消てくらし　月秋に成きふしもあらバ秋桜鯛ハ美しく　旅ハし　飯汁ハ淋し　花の雲ハ眠りを催は　花の咲雲ハ眠さまし　花散ハ旅ハしき催き果ある情あり　落ちハ静にして　花をもむる情の葉ハをしまれ○花櫃といへバ広く　其の心艶麗ハせまく　秋の収穫よし旅人ハ夕アのくろ帰人ハ新あり　山路とハ夜分ある体にしてよろし　山居とハつとき淡泊かさちよろし　蜑ハ家業なる蜜み其御埃りハきたなき蜜ふよるべし　埃と唱へる時ハ風に花立なるよろし　蓄とみハ七ツ時なり　夕ぐれとハ六ツなり上ミくなり　ただし　夕まぐれとハ六ツすぐるころ

むし　松虫　月　月見　名月　今日の月　月今宵　秋の

秋むしの音ふ忠哉の似りくるか　里明
松むしや琴ふ調べる声ま又哉　鬼外
松虫や静かなるの月入る　乙良
月の秋仰ぐやせとや空ひとへ　稲石
川中へ皆夜よるや月の露　鶴石
栄桜見たり八小夜の月見る事　乙丸
見たししる家月見の名所かな　艸分
名月や波の花さく隅田川　甘粟
名月へ寄るなるあきまありけり　心足
常くは我心澄さる今日の月　美湖
雲上水の果より出て今日の月　川遊
月に影を投げて見る今宵哉　桜后
一下せぬ宵はあれども月今宵　呑舟
光りふるありの秋の月　錦永

月　秋の　小菜　時雨　雪　霧　冬の月　冬至

雨後ふふ吹き清て秋の月　梅谷
ところませさむる声の秋の月　見外
百百しふ涼し あきころ　貞喜
家々ある小菜や芥子の花見た人　壺永
はつはつと浮中ふくる小菜哉　為山
味噌あれ八時雨めくあり草の庵　一郎
鶏の畑ふ寝るしくれの事　梅塢
彩人のさこえる霧の光りの家　永久
出る海へ浮や霧の渡しふ　妙月
波落し添ふ冴る声ささの家　左艸
懐ま耳よ出へて冬し夜寒ひ　紅月
玉川の水面と浮けり冬の月　詠久
引裂さ冬ある冬の月　遥旅
二階で見出あ冬至哉　柳架

あり併ゆふまぐれと仮名書よし黄昏とはゆふまぐれのところ
之人の新の俳諧とまうつかるさといふをたてて時と云之
○おふと計りハか後之

抄情引句

父母のしきりに恋し雉子の声　さいはひを思ふの情あり
菊の香や奈良には古き仏達　さくさ千年の余情あり
猿を聞人捨子に秋の風いかに　猿に勝とのこころあり
夏の月御油より出て赤坂や　東海道に御油赤坂の間十六丁の駅程に夏の夜の短きをきかせたるなり
僧朝顔幾死かへる法の松　翁の子なるあき序あり

新宅

新宅祝ひには火を忌るを第一の心得として句作有べし
水辺を詠むにも障じ 水に係る名に唱ふる言葉にても皆
水の縁をはらふものなどといふ　天井 鴨居 鴫居 蟇股 溝 流し 其の外　近けある句に
風を人もあって戯くやけつく掛　二字のさはりあり考ふべし

七夕の秘伝

一名七姫とも其の名をとる神ありといふ
春　佐保姫　一名青姫とも其の名をとる神ありといふ
同　白毛姫　霞をさしてかく名付るとメと八日の芽さしといふ也
秋　龍田姫　秋の色を司とる神とも又紅葉をさしていふとも
同　薫姫　女七夕をさして二星を神と祭る言葉なるをさして名付

神叩　俤の乳人　旅そらもたき　硯友
登　　捨てゆくつゆの雪さえかへり　一巣
　　筆目のあり捨てゆや門の雲　繁由
枯　　一筒のおもしろく　これ野火　傑山
蕨　　ひと夜よ川曳の　枯野をあり　梅二
夢の　　夢の夢や指折されて　畑の鴉　麦名
七　　菜畑や鳥の　啄ふ仕せうら　芭蕉翁
蝶排　　門並み時を定む世　灯ともし　五徳
綱代　　ましもきや筵の　名残りの　雲邑
子ら　　白露や豊かに　初霜うつる　綱代　宇
　　春代の雪解ゆつるや　綱代小袖　乃山
　　下うるみ立つや　甲よきあるべし　情知
　　汐吹せの松やうるのより　雲　二釜
　　夜のつの出行りそくまり　咽　梅枝

日射名姫　そも女とうを　名とふあるの名をれバ　秋をまる弟あるべし
日笹蟹姫　日女ちよねらひの　多をうみる一歩ようみて
女山姫　成就するのをあり
　　ゆうをしてふ夜のそふを　ちよあり
右七種　麦二名　秋四名　文一名　七種秘伝あり

芭蕉翁五作発句伝

初の年や　春きき　掛のあるびとー
蓬莱よ雪も松浪労のもの　俤り
植綱の歯くきも寒し　矣のたふ
堤やも消る泪の　熱る　、あと
ほ落れて　栗つくもまや　時る

喰　　年人よ出あけり　年人
　　魅の胃ぶの　ぶ　ぶ　ぶ　ぶ
　　緒のまでるふしい祭りけり
口切　　松月　見か　情知
年　　ぶきりや　梅ふしの　実生　実生
ゆるし　　須走もあそ　ぶ　山林　山林
年派　　ふよりそ　例はして　春之称　春之称
　　煤の少も流る　年の風　情知　情知
初年　　年の　ぶ　ぶ　村松　村松
大三十日　　ぶ灯ふ門掃く　年の　春之称　春之称
　　初年や　元会の　ぶ　隣　ぶ　ぶ
　　ふぬ灯ふ年の　大鳴る　梅姫　梅姫
首書俳諧秘決集　新撰五百題終　実生　実生

発句如左

ぶや　そうよ　めう　そう　けり　さそ　たそ
たれ　こそ　ある　う　い　いさ　いざ　ふ　そも　けれ
ど　らふ　ん　ん　せん　けん　いづれ　いろみ　いづ
いづこ　さぞま　かな　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
つ　ぬ　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ま　ま未の　ー　発さくべし　ぬ　ぬ　翌年の　ー　白ー
下　知　年へ　きけ　させ　たて　ぬ　ぬ　〇　如左　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
新撰　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
季寄　俳諧秘決集　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

版權免許

編輯人　神田區千代田町廿八番地　東京府平民　加藤重兵衛

出版人　日本橋區通四丁目十番地　東京府平民　松田幸助

考正人　芝區芝切通榮町五番地　東京府平民　手塚幸七

明治十五年十月十二日
同　同年十一月刻成
同　十二月十二日改正再刻御届
十六年三月　刻成

定價金廿五錢

一首　俳諧節用集
書　俳諧あもあぶ

一首　書
七部集　**掌中俳諧季寄大全**　手塚貞彦輯　折本全二帖

掌中俳諧季寄便覽　谷壯太郎輯　折本一帖

增補四季部類大全　花屋菴著　小本全二冊

一芭蕉公羽口訣　嵐雪　俳翼　手塚貞彦輯　小本全二冊

一首　古今和歌集
書　和歌草分衣　**增補明治和歌教草**　谷壯太郎輯　折本全一帖